

II 平城・京内寺院等の調査

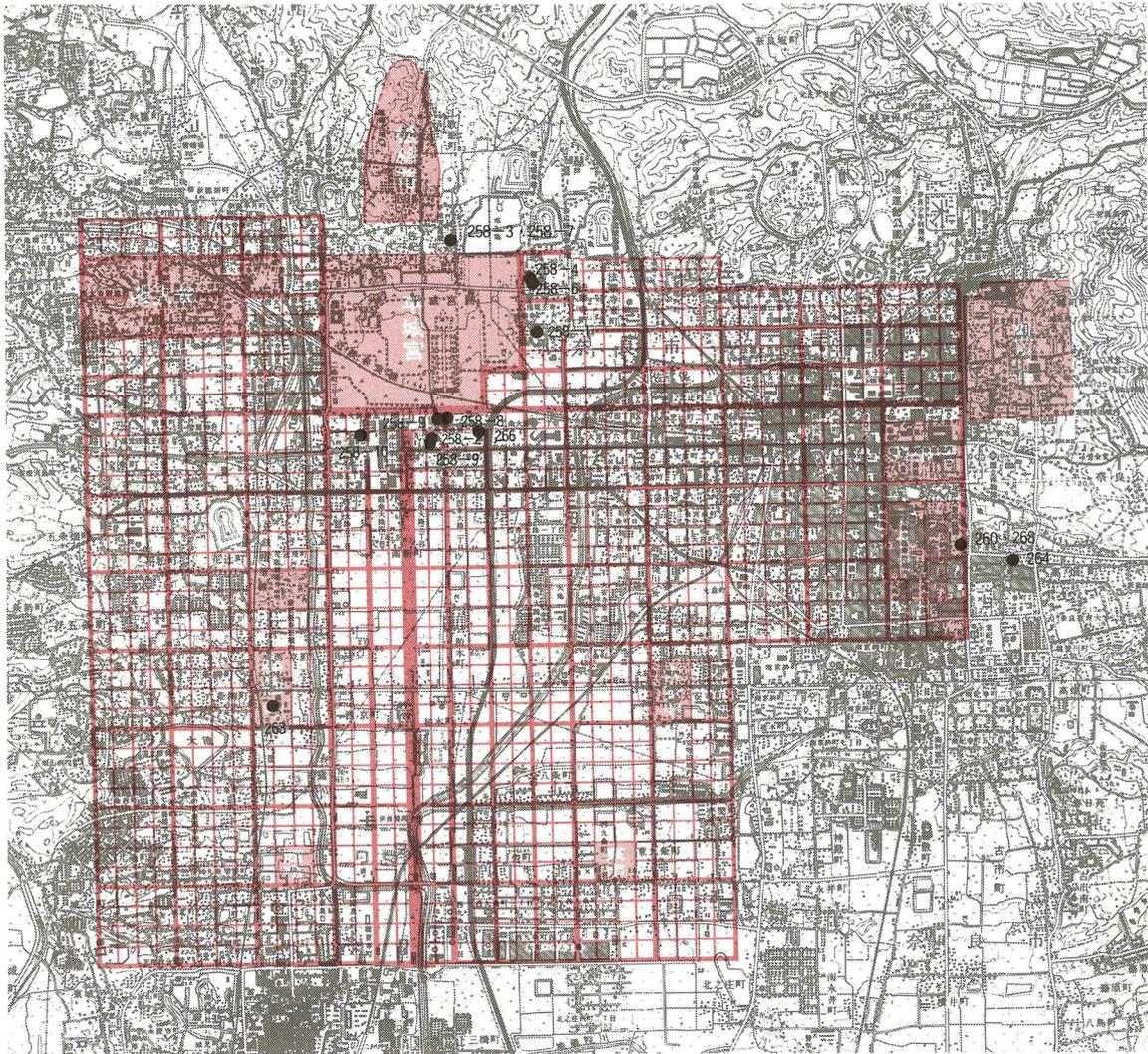


図22 1995年度 平城京内発掘調査位置図 1:5 0000

表7 1995年度平城京内発掘調査遺跡一覧 (\*印は巻末表11に概要を掲載)

| 次数     | 遺跡名          | 地区     | 発掘期間                    | 面積(㎡) | 担当者   | 備考     | 頁 |
|--------|--------------|--------|-------------------------|-------|-------|--------|---|
| (平城京)  |              |        |                         |       |       |        |   |
| 258-2  | 左京三条一坊七坪     | 6A F J | 1995. 5.16.~ 6. 9.      | 250   | 館野 和己 | 駐車場造成  |   |
| 258-3  | 市庭古墳東北部      | 6A S B | 1995. 8.22.~ 8.31.      | 46    | 山崎 信二 | 秋山興産   |   |
| 258-4  | 左京一条二坊十坪     | 6A F C | 1995. 9.20.~ 9.28.      | 42    | 長尾 充  | 村田憲重宅  |   |
| 258-5  | 左京三条一坊七坪     | 6A F J | 1995.10.24.~11.10.      | 160   | 小沢 毅  | 丸栄住宅産業 |   |
| 258-6  | 左京一条二坊十坪・坊間路 | 6A F C | 1995.11.14.~11.22.      | 30    | 箱崎 和久 | サワダホーム |   |
| 258-7  | 市庭古墳周濠       | 6A S B | 1995.12.4.~12. 8.       | 15    | 岸本 直文 | 城本保治宅  |   |
| 258-8  | 左京三条一坊坊間路    | 6A F J | 1996. 1. 9.~ 1.19.      | 30    | 小林 謙一 | 八木良次宅  |   |
| 258-9  | 左京三条一坊八坪     | 6A F J | 1996. 1.17.~ 1.26.      | 42    | 浅川 滋雄 | 日生     |   |
| 258-10 | 右京三条一坊十坪     | 6A G F | 1996. 2.13.~ 2.22.      | 45    | 小林 謙一 | 瀬川一治倉庫 |   |
| 266    | 左京三条一坊五坪     | 6A F J | 1996. 1.23.~ 3.15.      | 395   | 岩永 省三 | フクウチ電化 |   |
| 立会     | 木取山古墳周辺      | 6A F C | 1996. 2.15.~ 2.20.      |       | 岸本 直文 | 水路改修   |   |
| (京内寺院) |              |        |                         |       |       |        |   |
| 258-1  | 法華寺          | 6B F K | 1995. 4.17.~ 4.19.      | 20    | 毛利光俊彦 | 福井新次宅  |   |
| 260    | 大乘院庭園        | 6B G K | 1995. 7. 6.~ 9. 8.      | 330   | 小野 健吉 | 史跡整備   |   |
| 263    | 薬師寺講堂        | 6B Y S | 1995.10. 2.~1996. 1.25. | 1,480 | 寺崎 保弘 | 伽藍復興   |   |
| 264    | 頭塔           | 6B Z T | 1995.10.16.~1996. 3.29. | 8     | 高瀬 要一 | 史跡整備   |   |
| 268    | 大乘院庭園        | 6B G N | 1996. 2.26.~ 3.21.      | 210   | 浅川 滋雄 | 史跡整備   |   |
| (その他)  |              |        |                         |       |       |        |   |
| 266-補  | 法隆寺          | 6B H R | 1995.10. 3.~10. 9.      |       | 小沢 毅  | 百済観音堂  |   |

## Ⅱ－1 市庭古墳東北部の調査 第258－3・258－7次調査

### 1 第258－3次調査

本調査は平城天皇楊梅陵（市庭古墳）の東北部で住宅建設が行われるので、それに先だち事前に発掘調査を行ったものである。発掘区は南北12m、東西3.8mのトレンチを設定し、発掘面積は46㎡である。調査日は、1995年8月22日から31日まで。なお、工事施行者との事前調整の過程で、発掘面の深さに対して条件をつけられたので、発掘区全面を周濠底部まで掘り下げることはできなかった。

発掘区中央では2箇所長方形のゴミ穴があり、地表面から深さ2.5mまで家屋の廃材がぎっしりと埋め込まれていた。調査はこの家屋の廃材を取り除くことから始め、廃材撤去後、断面を観察して墳丘と周濠を確認することにした。

土層は、昭和の土層と判断できるものがトレンチ北端で50cm、トレンチ南端で20cmの深さまであり、その下に茶灰粘質土・暗茶灰粘質土の土層（中世から近世にかけてのものであろう）がトレンチ北端で40cm、トレンチ南端で15cmの深さまで堆積していた。その下には、深さ1～1.5mの奈良時代の土層（黄灰色粘質土・褐灰色粘質土・灰褐色粘質土）があり、市庭古墳周濠の埋め土と判断できた。したがって、墳丘面および周濠基底部の確認（即ち地山面の確認）は、工事施行者が要望した発掘面の深さを勘案して、トレンチ南端部で墳丘面を確認すること、2箇所の家屋の廃材を埋め込んだ長方形のゴミ穴の下の部分で、さらに掘り下げをおこない周濠底部を確かめるといった点のみに限定した。

まずトレンチ南端部では、径10cm前後の礫を多数含む灰褐粘質土層が深さ30cmで堆積しているが、地山面に接して礫が敷き並べられている状況は確認できなかった。その下に、黄白色粘土の地山面があるが、地山は北に行くにつれて約20°の傾斜をもって下がる。次に、2箇所の長方形ゴミ穴の下では、礫を多数含む灰褐粘質土層（即ち落下した葺石堆積土と考えられるもの）が50～90cmの堆積をなす。北側の長方形ゴミ穴の下では、径20～30cmの大形の石が重なり合って、堆積しているが、発掘区の狭さのため掘り下げ面が周濠底部まで達せず、この部分での地山確認はできなかった。 (山崎信二)

### 2 第258－7次調査

個人住宅改築のための発掘調査である。第258－3次調査のすぐ東に隣接する地点。敷地北辺に外堤の基底部がわずかにかかると想定されたが、家屋の基礎のため調査区を設けることができなかった。そこで、敷地の南寄り部分に、東西5m・南北3mの調査区を設定したが、完全に濠底の位置にあたり、底面の標高を確かめることを目的とした。

地表から約3mについては重機により掘削し、そこから下部へは手掘りによった。現地地表下0.8mで周濠埋立土上面に達し、この面で、調査区南よりに東西約2.4mの大土壌を確認した。

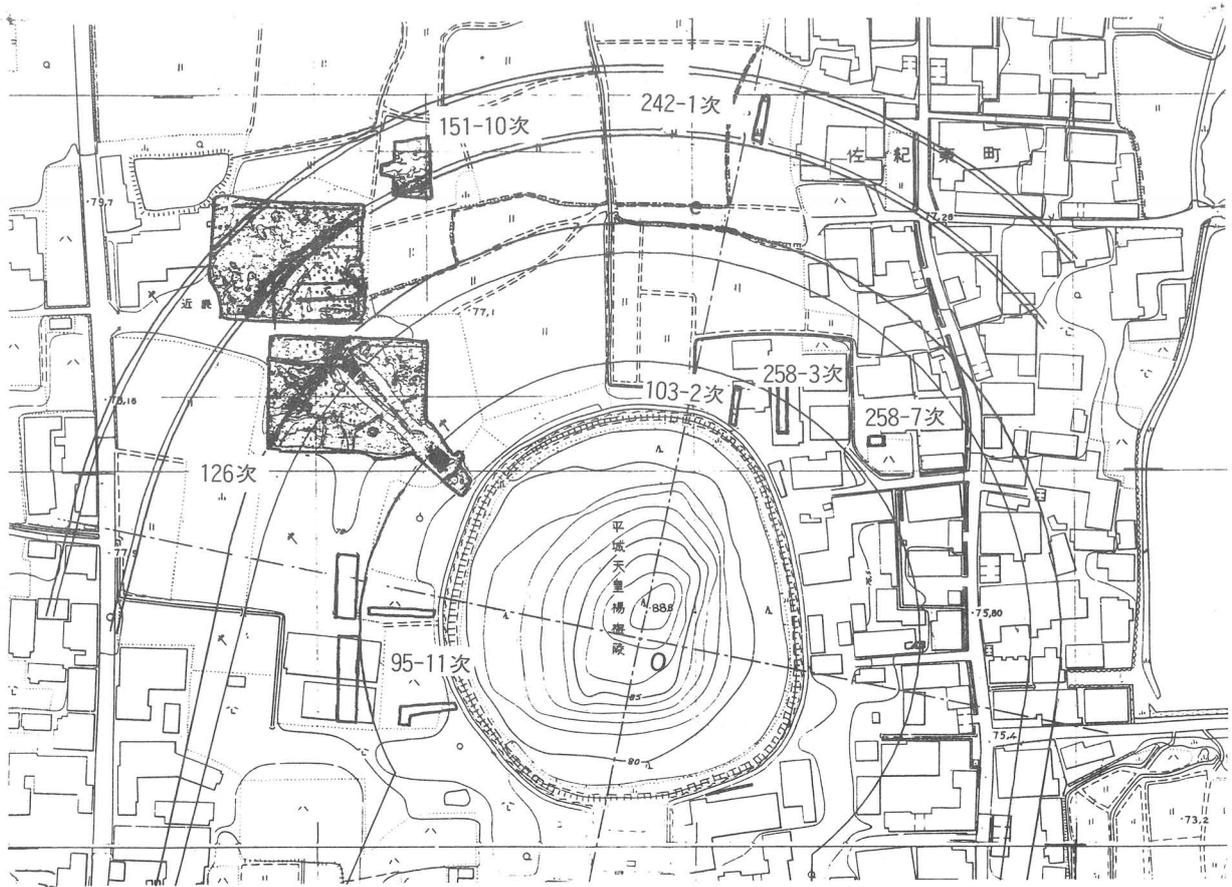


図23 調査位置と墳丘復元案 1 : 2000

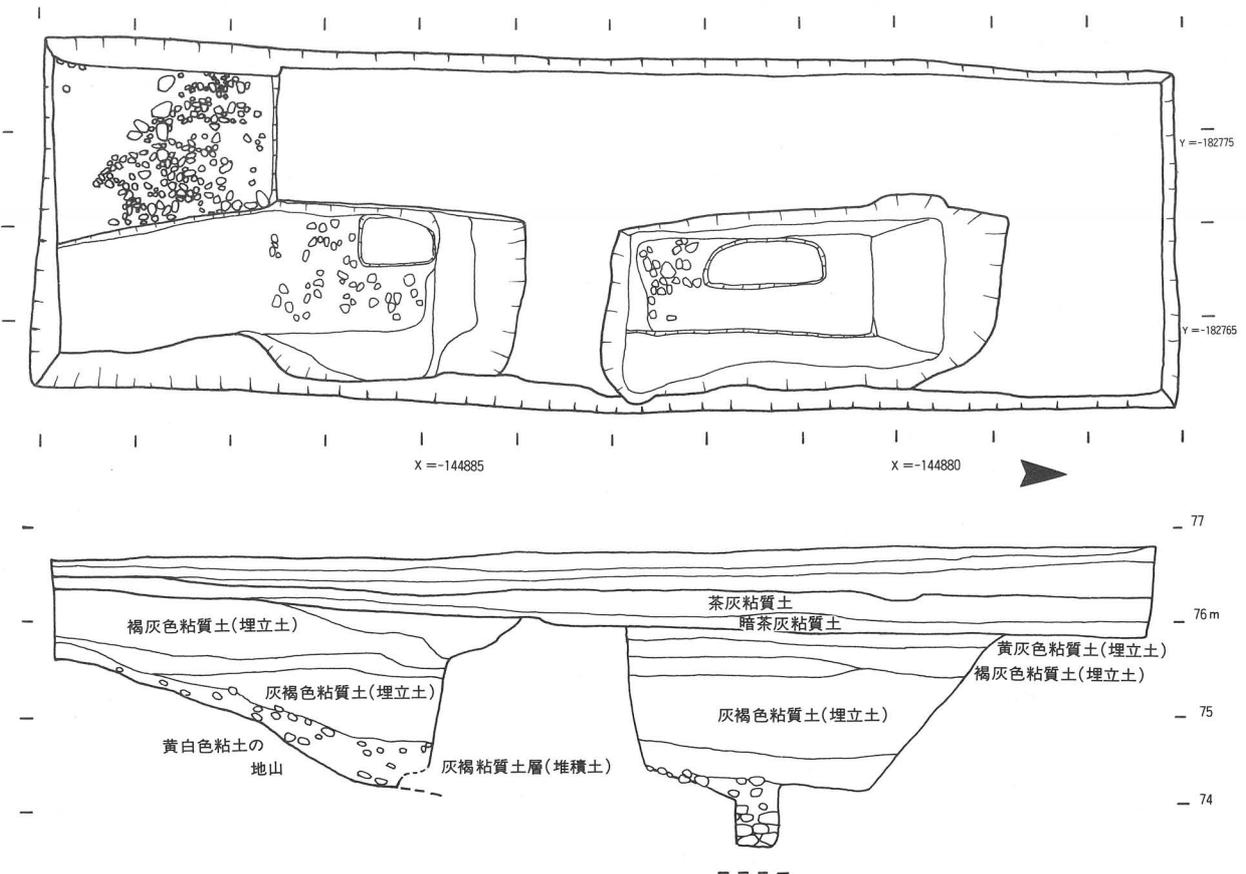


図24 第258-3次調査区平面・断面図 1 : 80

井戸かとも考えられるが、井戸枠はなく、遺物もまったく含まれておらず、性格は明らかでない。これ以外の遺構は少なく、小穴も建物の柱穴ではない。最終的に濠底に達したのは、地表から4m下の標高72.5mである。地山は青白色の砂層であった。周濠の埋没状況は、濠底から1.3mが古墳築造時から奈良時代までの堆積層で、青灰色の砂質粘土および粘土である。転落した葺石が下部でより密に含まれていた。それより上の約1.9mが奈良時代の埋立土である。橙褐色あるいは黄褐色系の土壌で、おそらく市庭古墳後円部の封土を崩して埋立てたものと考えられる。埴輪小片が認められた以外、古墳にともなう遺物は出土しなかった。

### 3 墳丘復元案との比較

以上の2箇所の見解を、市庭古墳の墳丘復元案（岸本「市庭古墳の復元」『文化財論叢Ⅱ』1995年）に照して検討しておく。第258-3次調査は、後円部後端の位置を決める調査になりうると考え、調査区の設定も、復元案の基底部分がおさまるような南北トレンチとした。残念ながら、深い掘削が制限されたために、墳丘基底部分を検出するにはおよばなかったが、良好な状態ではないものの、墳丘斜面を検出し、断面において地山の傾斜を標高74m近くまで確認した。トレンチは墳丘の斜面に対して斜めの位置になるため、斜面に直交方向での傾斜ではないが、約20°の傾斜で下ることが確かめられた。一方、東へ約25m離れた第258-7次調査で確かめた周濠底部の標高は約72.5mである。第258-3次調査区の墳丘基底部分、これよりいくぶん高いと思われるが、検出した地山の最深部より、さらに約1.5mほど下方に墳丘基底部分想定でき、傾斜をそのまま延長すると、調査区の中央やや北寄りに位置することになる。その位置は、想定していた市庭古墳の墳端と矛盾するものではない。

以上のように、発掘所見はこれまでの想定とほぼ整合し、正確な位置をおさえた訳ではないが、大きな変更の必要はなさそうである。最近の市庭古墳周囲の調査が、個人住宅にかかわる小規模なものが多い中で、本調査は開発面積が広く、墳端確認の機会と考えていただけに、掘削の深さが制限され、調査区内に墳端がおさまることが確実でありながら、それを検出できなかったことは残念である。

（岸本直文）

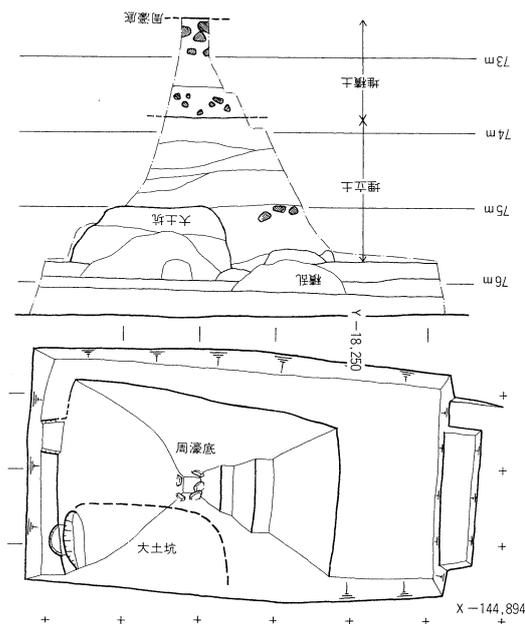


図25 第258-7次調査遺構平面・断面図 1:100

## II-2 木取山古墳の調査 立会

奈良市による木取山古墳西北部の水路改修に伴い、奈良市教育委員会と奈良国立文化財研究所で立会した結果、溝状の落ちこみが確認された。木取山古墳の周濠の可能性を考慮し、掘削面での遺構確認と、平面・層位図の作成を奈良国立文化財研究所が行うことになった。改修する水路は、北から南へと流れ、木取山古墳周濠想定位置付近で西へと折れる。改修の掘削工事は北側から始まり、コンクリートの基礎工事の合間に遺構を確認した。

### 検出遺構

水路の屈曲部から北へ約20m付近で、北側へと落ちこむ遺構SX01を検出した。平面での遺構肩部の方向は、東西方向よりも、東に対してやや南へ振れる。断面観察では、遺構は30°強の傾斜をもって下方へと続いている。なお、このSX01の北側肩部については、工事中に観察可能な平面および掘削断面に留意したが、明らかな地山の上がりには認められず、正確な規模は不明である。また、その南では、幅5mほどの地山部分をへだてて、南方へと落ちこむ遺構SX02を検出した。水路の東側には地盤が一段下がり家屋が建っているが、このためか水路掘削部の東側は後世の攪乱がおよび、水路底部で幅2m分を確認したに留まる。この落ちこみの検出ラインもSX01と同様に、真東よりもやや南へ振れる方向をとる。遺構は40°ほどの傾斜で下っており、さらに下方へと深く続く様相を示している。水路の屈曲部までは、この遺構SX02を埋める土層が続き、屈曲部から西側3~4m付近で西側の肩部を検出した。水路の中央部は水路堆積土が残存しており、肩部は南北に分断された格好で検出した。この南北では平面位置がややずれるが、北側の位置が本来の肩部であり、南側は、おそらく後により外側へ緩やかに広がったものであろう。

SX02の西肩から4m西側の南壁では掘形一辺60cmほどの柱穴1基、さらに水路のより西方で、南北棟の妻になる3基の柱穴を検出した(SB03)。いずれも40~50cmの方形ないし隅丸方形形状の掘形である。調査範囲が狭く、北妻か南妻かは不明。柱間は7尺。

### 遺構の性格

当初、検出したSX01・02が木取山古墳の内濠および外濠である可能性も考えたが、調査範囲が狭いものの、遺構の検出ラインが木取山古墳の後円部を中心とする円弧を示さないので、古墳の周濠とは考えにくい。とくにSX01は、水路西側に続かず、外濠ではありえない。ただし、SX02については、平面形が不整形ではあるが、その位置を考慮すると、のちの拡張などにより本来の周濠円弧が変形したこともありうる。木取山古墳の復元案は図26に示した通り(『昭和60年度平城宮跡発掘調査部調査概報』1986年、64頁)であるが、調査箇所がそれ程多くなく、限られた定点からの復元であり、墳丘や周濠の平面形や位置はまだ確定的ではない。したがって、今回の調査箇所まで周濠がのびる可能性も、考慮に入れておく必要がある。ただ

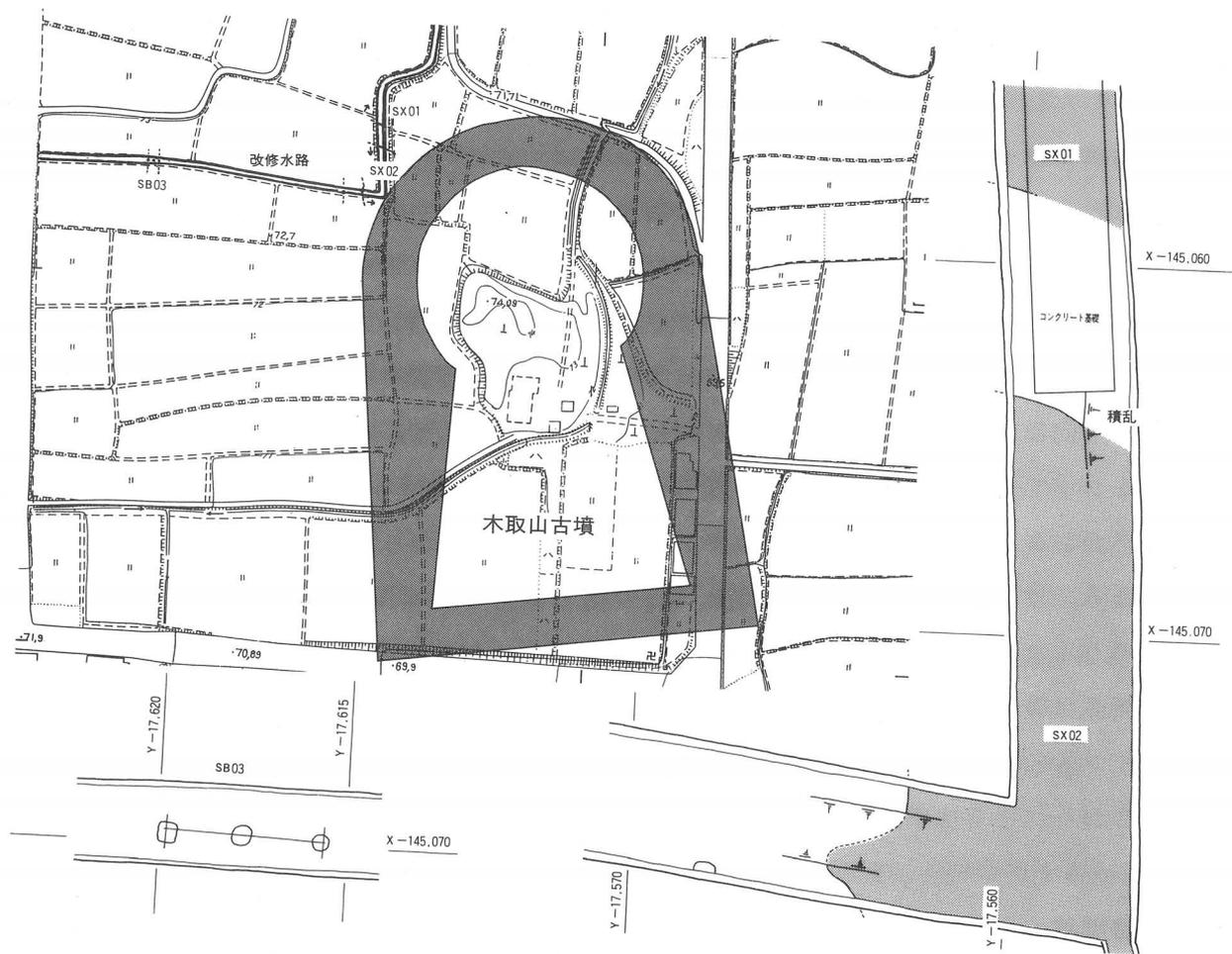


図26 改修水路の位置（1：2000）と検出遺構（1：200）

し現状の地形は、今回改修した水路を境に東へ南へと下がり、とくに水路が東西に走る部分の南側では段差をともなって低くなっており、従来の推定の通り、より低い部分で周濠がおさまると理解する方が考えやすいのかもしれない。ともかく、周囲の調査をさらに蓄積する必要がある、それによって今回検出した遺構の性格を再検討する必要がある。

SX01・02を埋める土層は、堆積層ではなく人為的な整地層とみられ、少量の埴輪片とともに奈良時代の土器をかなり包含している。その状況はSX01・02ともに共通し、木取山古墳周濠のかつての調査所見とも一致する。つまり、SX01・02ともに、条坊などの奈良時代の遺構ではなく、古墳時代の遺構とみる方が妥当と考える。コナベ古墳の南に位置することも考慮すると、古墳に関わる遺構の可能性が高い。昨年度の法華寺新町における調査から、木取山古墳の西方にも古墳が存在したと推定した（『1994年度平城宮跡発掘調査部調査概報』1995年、56・75頁）。コナベ古墳の南に、木取山古墳のような100mを前後する前方後円墳に加え、より小規模な方・円墳をも含む古墳群が広がっていたことは十分に想定しうる。今後、この地域の調査を進める上で留意すべき点として、注意を喚起しておきたい。

（岸本直文）

調査区は左京三条一坊七坪のほぼ中央部西寄り、1992年に行った第231次調査区に西隣する位置にあたり、南北18m、東西14mの範囲を占める。土層は上から耕土・床土・橙黄色土・黄褐色粘土・黄灰白色砂質土となり、遺構は現地表下約30cmの黄褐色粘土層の上面で検出したが、削平により遺構が失われた所もある。検出した奈良時代の主な遺構は、溝1条、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、塀状遺構4条、井戸1基、土坑1基である。

南北溝SD01は、発掘区北端で幅約2.5m、南端で約2m、深さ5~20cmで、北へ行くほど深くなるとともに、やや西に広がる。古墳時代・奈良時代前半の土器を含む溝である。

掘立柱建物のうちSB05は桁行3間、梁間2間の南北棟で、柱間は桁行5尺、梁間6尺。SB07は桁行4間、梁間2間の東西棟身舎に南廂が付く。柱間は桁行は8尺、梁間5尺、廂の出は7尺。身舎の南側柱と廂の柱穴の中には、削平により失われたものもある。SB11も桁行4間、梁間2間の身舎に南廂が付く。柱間は桁行8尺、梁間6尺で、廂の出は8尺。SB07・SB11とも西妻柱は西壁断面で確認した。ともに廂の出は身舎梁間方向の柱間より大きい。SB08は調査区の西端で南北2間(柱間8尺)を検出したもので、西に伸びる建物であろう。礎石建物SB13は発掘区北端で東西4間分検出した。抜取が大きく浅く、かついずれも掘形内に納まることから、礎石の抜取と判断した。礎石据付の掘形は径70cm程度、柱間は4.5尺と小さいことから倉庫であろう。

次に塀状遺構SA02は発掘区南端で検出した東西方向のもので、東でやや北に振れる。柱間は5尺ないし6尺と不揃いで、柱穴も小さいから柵であろう。SA06はSD01埋土上で2間分(柱間5尺)を検出した南北塀、SA09・SA10はやはり2間分(柱間はそれぞれ4.5尺、5尺)のみを検出した東西塀である。

井戸SE03は径約2.2m、深さ2mの隅丸方形の掘形の中に、3段の井戸枠からなる。上段は1.1m四方の方形縦板組横棧留め井戸枠で、腐敗して下端部30cm程のみが残る。その下の中段は、高さ60cm、径85cmの曲物の周囲に縦板をめぐらせる。曲物は四重にたがをはめる。下段も同様に、高さ50cm、

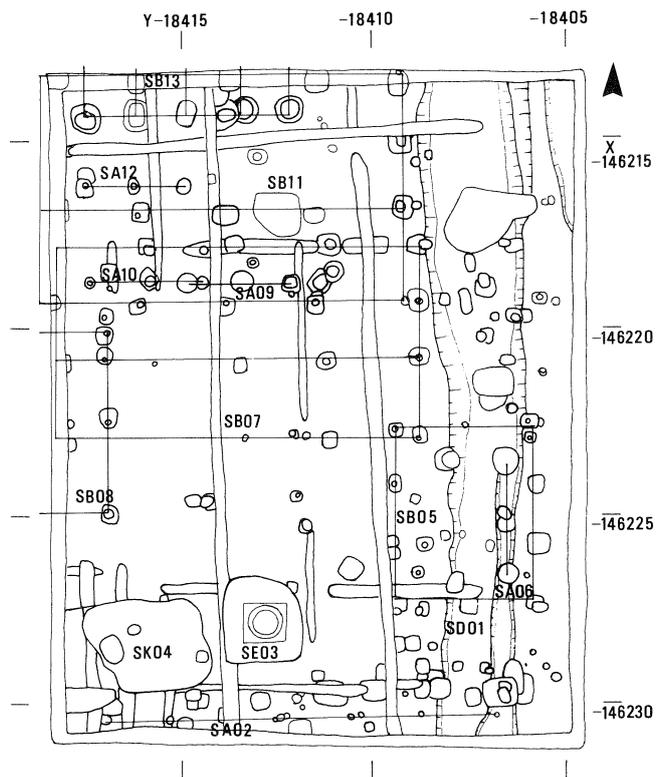


図27 第258-2次調査遺構平面図 1:200

径65cmで三重のたがをはめた曲物の周囲に縦板をめぐらせて補強する。井戸底には拳大の石を敷き、その上に下段枠を据えていた。また下段曲物の上端では、それと中段曲物の間にやはり拳大の石をめぐらせている。なお井戸は、中段上端まで土を埋め、その上に人頭大の石を投げ込んで廃棄していた。井戸枠内からは神功開宝2枚と奈良時代後半の土器が出土した。

土坑SK04は約3m四方の不整形土坑で、深さは15cm。奈良時代前半の土器を多く含む。なおここは西に発掘区外にまで落ち込みが続き、その東端が土坑状になっていたものである。

さて、建物の時期については、相互の切り合い関係がSB07とSB11の間にしかなく、また時期を判定できる遺物の出土が少ないため、不明なものが多いが、SB05とSB07の柱穴からは奈良時代後半の須恵器が出土している。東隣における第231次調査の知見では、建物遺構は奈良時代前半には1棟のみで、多くの建物は奈良時代後半に建てられ、それはA・B2時期に大きく区分できる。奈良時代後半に多くの建物が現れるという点は今回の知見とも一致する。その成果も参照して今回検出した遺構を見ると、奈良時代前半に流れていた南北溝SD01を後半に埋め、後半のA期にはSB05とSB11がほぼ柱筋を揃えて造られ、B期にはSB07・SB13が造られた。SB08はB期ではないが、それ以上の時期の特定はできない。

第231次調査では左京三条一坊七坪は、奈良時代後半に一坪全体が一つの区画として用いられ、そこには大学寮が置かれていたと推測した（『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993年）。今回それを直接実証する文字史料は出土しなかったが、そこで指摘されている、建物はその平面規模・柱穴ともに規模がきわめて小さいという特徴は、ここでも共通する。また第231次調査区は七坪内で東西中軸線の東西にまたがる範囲を占め、本調査区はそれに西隣するという位置関係からすると、両調査区とも同じ敷地内に属すると考えられる。

第231次調査では坪の東寄りにある正殿の西側には、A期には東西棟、B期には南北棟が並んでいた。今回は小規模ではあるが、その中では中心的建物であるSB11・SB07はいずれも東西棟であり、その南東にさらに小規模な南北棟SB05が位置する。したがって今回検出の建物群は、第231次調査で検出された建物群とは区別されるブロックであったと考えられる。そのことは前調査で検出された西へ延びる道路遺構が本調査区までは延びないという点からも裏付けられよう。天保11(1840)年刊の『大内裏図』中で、内藤広前が平安京の大学寮の平面を復原した「大学寮図」によると、東半分を占める本寮・厨の西には、北から明経道院・算道院・明法道院という3つのブロックが南北に並び、それぞれ正殿とその前面の東西脇殿から成っていた。これはあくまで考証による復原であり、かつそこでは大学寮は四町占地であったから、この遺構と直接比較するのは留保されるが、第231次調査区で検出した遺構が仮に本寮にあたることとすると、本調査区はその西の院の並ぶ地区にあたることになり、「図」との類似点には注意されよう。しかし本地区の性格を確定することは、現時点ではまだ困難であり、今後の周辺での調査が期待される。

（館野和己）

1 はじめに

ガソリンスタンドの建設にともなって、左京三条一坊七坪の西南隅に近い部分の発掘調査を実施した。この坪における過去の調査としては、第231次調査(2200㎡、『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993年)、第234-16次調査(30㎡)、第242-8次調査(350㎡、『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1994年、67~73頁)、第258-2次調査(250㎡、本書所収)、奈良市第38次調査(155㎡、奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984年、11~14頁)がある。

今回の開発対象地は1500㎡におよぶが、そのうち、遺構が完全に破壊される地下タンクの予定地に、調査区を設定することになった。この部分の現況は水田である。まず、重機によって耕土と床土を除去したのち、以下を人力掘削とした。また、当初、北壁で確認した大型の柱列が調査区内にのびないことが判明したので、その平面を把握するために、北側へ部分的に調査区を拡張した。発掘総面積は、180㎡である。基準点測量の後、10月24日に重機掘削を開始し、11月10日にすべての調査を終了した。

層序 厚さ約20cmの水田耕土と床土の下に、古い耕土とみられる淡灰褐色砂質土が部分的にひろがる。その下は、奈良時代のベースとなる自然堆積層であり、遺構はすべてこの上面で検出した。遺構面の標高は、62.7m前後である。これより下は、流水による堆積を示す淡灰~黄灰色の微砂や砂が層を成しており、また、水田耕土の上面から70~80cmほど下には、特徴的な黒色粘土の堆積が認められる。この厚さは20cm内外で、以下は淡灰色の細砂層となる。

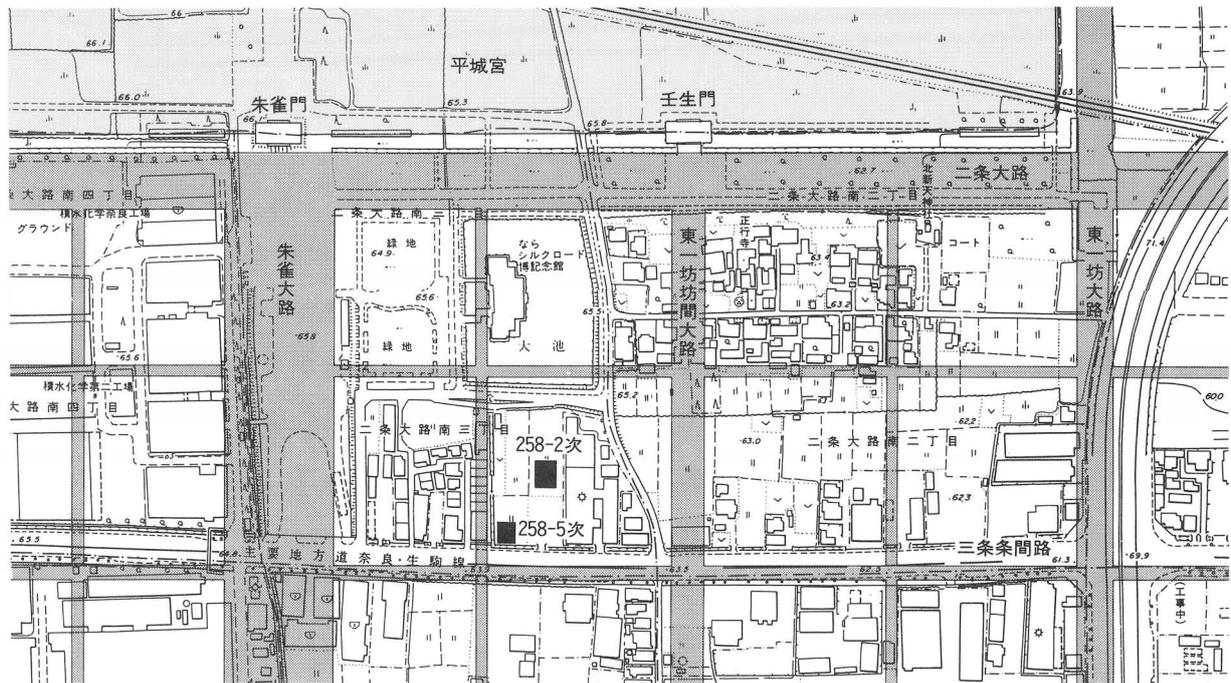


図28 第258-2・5次調査位置図 1:5000

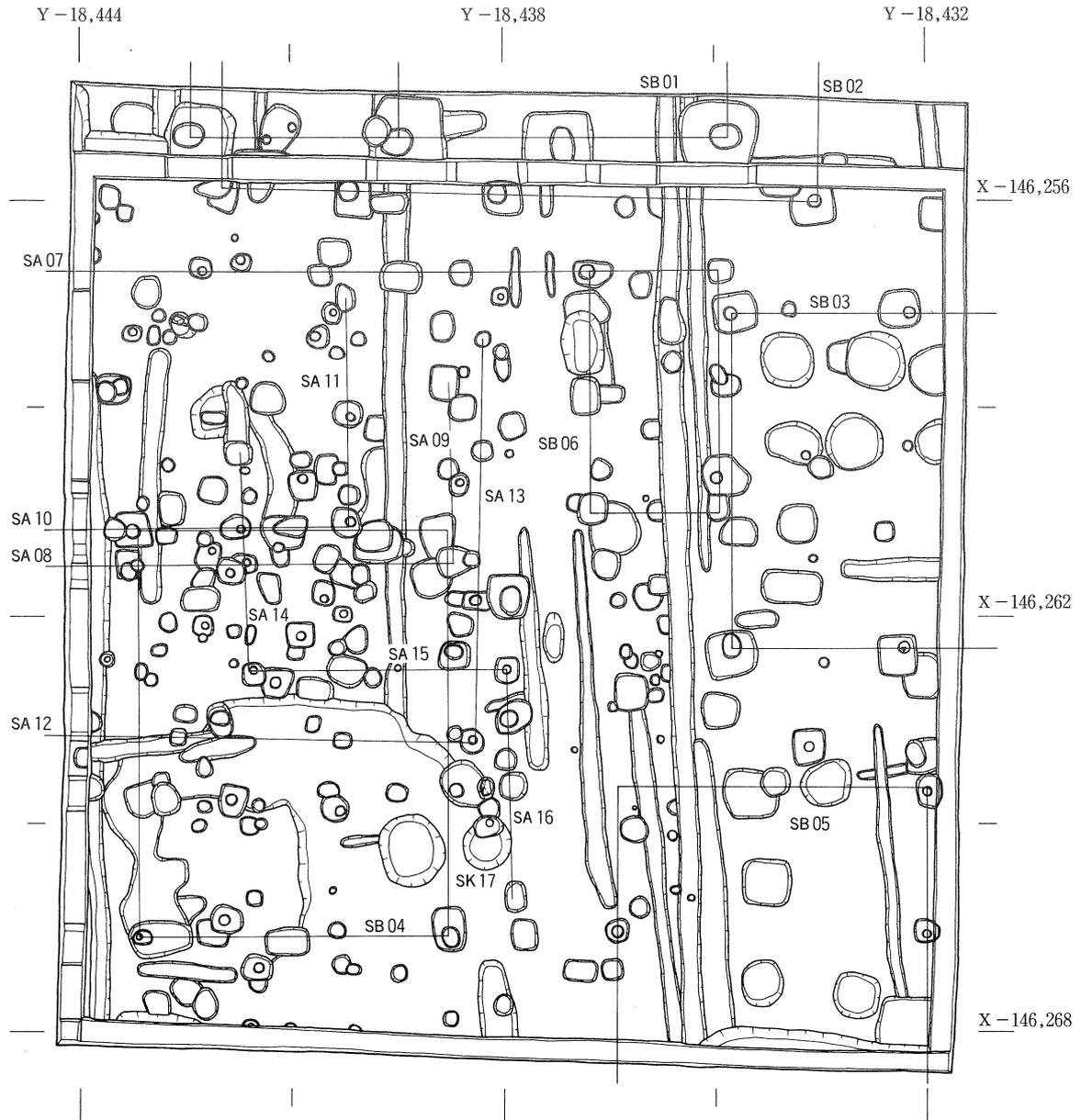


図29 第285-5次調査遺構平面図 1:100

## 2 遺 構

掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条、土坑数十基、溝数条を検出した。建物と塀は、基本的に奈良時代に属するものとみられる。このほかにも、まとまりを把握できない柱穴がかなりあり、建物や塀の総数はさらに増すことが確実である。土坑は、遺物の状況から奈良時代と判断できるものもあるが、多くは時期を明らかにしがたい。また、調査区の東半部を中心に、一見すると柱穴様の土坑がかなり存在するが、断ち割りの結果では浅い皿状を呈しており、柱穴とは認められない。溝は、いずれも京廃絶後の耕地化に伴うものである。

**SB01** 調査区の北端で南妻の部分を検出した。建物本体の大半は、調査区外に存在する。西側に廂をもつ南北棟建物である。身舎の梁間は2間で、柱間は8尺。廂の出は10尺である。廂柱の掘形は、身舎柱にくらべて浅い。柱はいずれも抜き取られており、抜き取り穴下部の収束状

況から復元される柱径は、25cm程度である。

**SB02** おなじく調査区の北端近くで検出した。東西4間分の柱列を確認したのみであるが、これを南側柱列とする、桁行4間の東西棟建物と考えておく。ただし、柱間は7尺前後で、ややばらつきがあり、塀となる可能性も残る。

**SB03** 調査区東部で確認した東西棟建物。西妻およびその一つ内側の柱筋を検出した。柱間は、桁行・梁間ともに8尺である。柱はすべて切り取られたらしく、柱痕跡が明瞭に残る。また、柱根の遺存するものもみられる。柱径は18cm内外である。

**SB04** 調査区の西南部で検出した。西側柱の一つを欠くが、桁行3間・梁間2間の南北棟建物と考えておく。柱間は、桁行・梁間ともに7尺であろう。

**SB05** 調査区の東南部で確認した。西北隅の柱穴を欠失するが、梁間2間の南北棟建物とみられる。柱間は、桁行・梁間ともに7尺である。

**SB06** 調査区の東北部で確認した。桁行2間、梁間1間の南北棟建物で、柱間はいずれも6尺である。ただし、北妻が次に述べるSA07と揃い、それとの柱間隔も6尺と等しいことから、一連の建物を構成する可能性も残る。

**SA07** 調査区西北部で検出した東西方向の柱列。柱間は6尺で、SB06の北妻にとりつく塀と考えておく。SB06とともに、より大型の建物の一部となる可能性があるが、対応する柱列は確認できなかった。

**SA08** 調査区西部で検出した東西方向の塀。柱間は5尺程度である。東端部で、南北方向の塀SA09とL字形に接続する

**SA09** 調査区の中央部で検出した南北方向の塀。柱間は5尺ないしそれ以下である。南端部で、東西塀SA08と接続する。



図30 第258-5次調査区全景（北から）

SA10 調査区西部で確認した東西方向の塀。柱間は約6尺である。東端部で、南北方向の塀SA11とL字形に接続する。

SA11 調査区西北部で確認した南北方向の塀。柱間は、6尺ないしそれ以下である。南端部で、東西塀SA10と接続する。

SA12 調査区西南部で検出した東西方向の塀。柱間は6尺から8尺と不揃いである。東端部で、南北方向の塀SA13とL字形に接続する。

SA13 調査区の中央部で検出した南北方向の塀。柱間は、南2間が7尺、その北が5.5尺ないし6尺である。南端部で、東西塀SA12と接続する。

SA14 調査区西部で確認した南北方向の塀。柱間は5尺である。南端部で、東西塀SA15とL字形に接続する。

SA15 調査区西南部の東西塀。柱間は6尺である。西端部で、北へのびる塀SA14と、東端部で、南へのびる塀SA16と接続する。

SA16 調査区南部で検出した南北塀。柱間は、5.5尺ないし6尺である。東西塀SA16とL字形に接続する。

SK17 調査区の南部で検出した土坑である。直径約1.2m、深さ約0.3m。ほぼ円形の平面を呈する。奈良時代の土器や土馬など、多量の遺物を廃棄している。  
(小沢 毅)

### 3 遺物

土器・土製品 溝・土坑や包含層から若干量の土器が出土している。ここでは、調査区の南部にある土坑SK17から出土した土馬と土器について報告する(図31)。

土馬(1・2)は、ほぼ同形同大のものが、2点出土した。1は頭頂部と左前脚の先端、2は、左の前・後脚と尾の先端を欠くほかは、ほぼ完形である。

ともに大型で、長くて反りの大きい顔と長い脚をもつ。頸部は扁平で、「たてがみ」を表現し、尾はほぼ水平にのびて、先端が上方に反り上がる。目は竹管の刺突で表現し、顔の後ろに短い粘土紐を貼り付けて「たづな」をあらわすが、鼻と口、背中の鞍の表現を欠く。胴部の

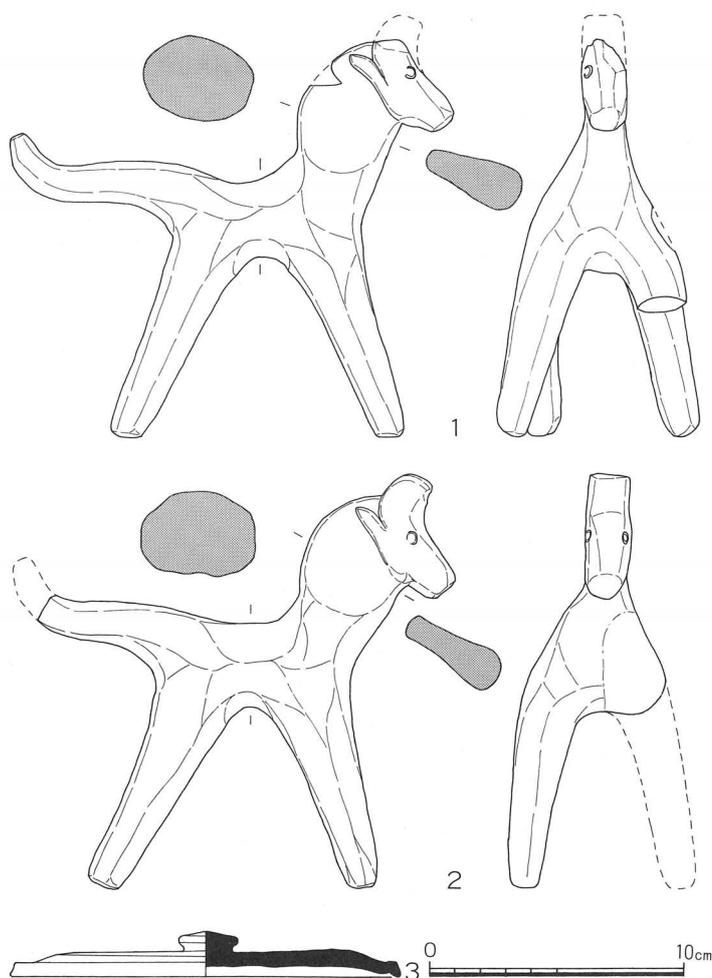


図31 SK17出土土器・土製品 1:3

断面形は蒲鉾形を呈し、棒状の粘土塊に四肢、尾などを貼り付けて製作したことがわかる。接合面で、脚が剥離している部分もある。この土馬は、右京八条一坊、西一坊坊間路の調査報告（奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984年）で第3型式と分類したものに当たるが、鞍の表現を欠くなど、退化した面も見られる。3は、平城宮土器Ⅳに属する須恵器Ⅱ群土器の杯BⅢ蓋。青灰色を呈し、頂部をロクロ削りする。

土馬は、溝や井戸などから出土することが多く、本例のように、土坑からほぼ完形のものが2体出土したのはきわめて珍しい。土馬祭祀のあり方に貴重な例を加えたことになる。そして、共伴した須恵器から、土馬の編年により確実な年代の一点を与えることもでき、その意義は大きいといえよう。（玉田芳英）

**瓦 磚** 軒丸瓦4点（6284E 1点、型式不明3点）、軒平瓦2点（6572A 1点、6689A 1点）、丸瓦16.0kg（204点）、平瓦30.0kg（416点）、磚0.5kg（3点）が出土した。いずれも奈良時代に属する。出土量から見て、調査区やその付近に総瓦葺の建物が存在したとは考えられない。調査地が坪の西南隅に近いことを勘案すれば、道路に面した築地に葺いた瓦ないしは、内部の掘立柱建物の棟部分に用いた瓦が主体であろう。

#### 4 ま と め

今回の調査対象である左京三条一坊七坪は、近年になって、かなり発掘調査が進んだ地域である。このうち、坪の中央部を南北に広く調査した第231次調査では、二時期の正殿にあてうる東西棟建物をはじめとして、建物や井戸などを確認している。そして、報告書では、遺構・遺物の状況や京内での位置、史料との対比を通じて、当該坪の性格を宮外官衙と想定し、大学寮の可能性が高いと結論づけた。

これを含めて、従来の調査では、全体に建物の密度が低く、大型の建物が少ないという特徴が指摘されてきた。ところが、今回の調査では、片廂ではあるが、かなり大型の南北棟建物を検出し、それ以外にも比較的密集した状態で建物が存在することが明らかとなった。この部分が、坪の西南隅に近いということとあわせて、それらの性格をあらためて検討する必要がある。とくに、SB01という南北棟建物が、坪の中心寄りではなく、その反対の西側に廂をもつ意義は軽視できない。また、これ以外にも、L字形の塀が、何回かにわたって、ほぼ同位置で作り替えられている。小規模な目隠し塀である可能性が高いが、そうした施設を含めて、この部分の利用形態の解明も今後の課題である。

今回の調査では、残念ながら、当該坪の性格を確定できるだけの資料は得られなかった。坪内にはなお未調査地を残しており、将来的な解明に期待がもたれるが、現在までの資料の蓄積をもとに、再検討を加えることも必要な段階にきているのではないか。（小沢 毅）

**第258-8次調査** 住宅建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は平城宮壬生門の南約120mの位置にあり、東一坊坊間路と東側溝の存在が予想されたため、敷地南辺に南北2.7m、東西11.4mの発掘区を設定した。基本的層序は、上から耕土、盛土、旧耕土、旧床土、黄褐砂質土ないし灰白褐砂質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は約62.4mである。

調査の結果、溝4条、土坑1基などを検出した。土坑SK01は、東端が発掘区外になる南北1.3m、東西1m以上の方形の土坑。南北溝SD02は幅約0.9m、深さ約0.2~0.3mで、少量の瓦片を出土した。南北溝SD03は南流する幅約3.4m、深さ約0.9mの溝。木葉文のある壺の胴部破片など、第Ⅰ様式の弥生土器が出土した。斜行溝SD04は調査地において南北溝SD03と交叉する下層の斜行溝。推定幅約3m、深さ約1mで、北西から南東の方向に流れる。

東一坊坊間路は、左京三条、左京七条等の調査では、溝心心60大尺（約21.5m）と判明している。しかし、今回検出した南北溝SD02の心は壬生門心の東11.8mにあり、東一坊坊間路心が壬生門心と一致すると仮定すれば、東一坊坊間路は溝心心23.6m（80小尺）となる。本調査地の北約50mの第123-24次調査では東側溝を検出しておらず、また、当調査地の遺構検出面は、壬生門前面の二条大路路面検出面より約1m低く、加えて、弥生時代の遺構を検出していることから、後世の削平のため、痕跡的にしか残っていなかった可能性も考えられよう。（小林謙一）

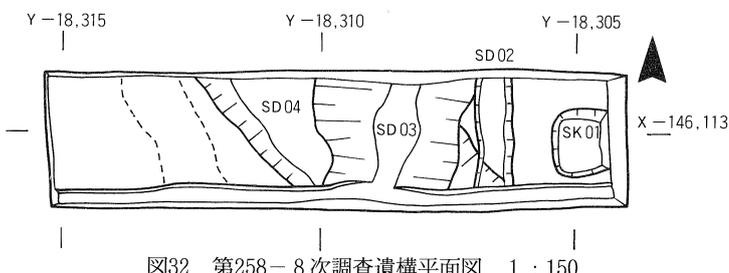


図32 第258-8次調査遺構平面図 1:150

**第258-9次調査** 第258-8次調査区の約40m西で、坪の中央東よりにあたる。東西11m、南北3mの調査区で、東西溝1条、炭入土坑2基などの遺構を検出した。遺構検出面の標高は約62.3m。

東西溝SD06は、トレンチの中央部から西壁へ下る素掘りの東西溝で、幅が0.8~1m、深さは西壁部分で約0.5mである。埋土から瓦が数点出土した。トレンチ北壁東寄りでは、2つの炭入土坑SX07・08を検出した。SX07・08はいずれも不整形で、多量の炭を含む埋土からは、平城宮土器Ⅲの破片が数多く出土した。トレンチ東南隅のSX09は、東西1.2m以上、南北約1.3mの円形もしくは楕円形の土坑である。

断割り調査によると壁の落ち方が垂直に近く、井戸跡の可能性がある。重複関係から、SD06よりも古い時代の遺構である。（浅川滋男）

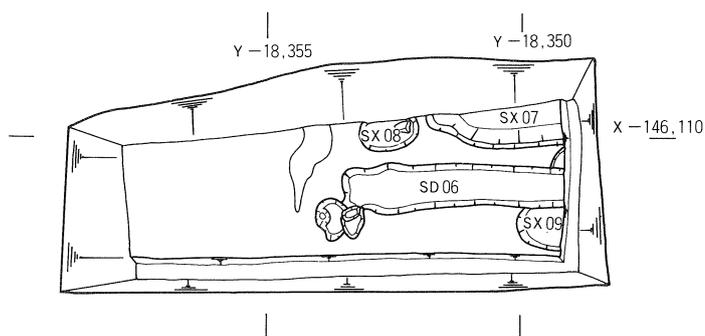


図33 第258-9次調査遺構平面図 1:150

## Ⅱ－6 左京三条一坊十五坪の調査 第266次

### 1 はじめに

ホテル建設の事前調査である。調査地は、国道24号線（奈良バイパス）と国道368号線（大宮通り）の交差点の北約100m、24号線高架の西側にあり、左京三条一坊十五坪の東北部にあたる。この坪は過去の調査で、中央部から西辺中央部にかけて（奈文研第230次Ⅳ区）、東南部（奈良市第94次）、東辺中央部（奈文研第118—8次）、東北隅部（奈文研第230次Ⅰ区）、北辺中央部（奈文研第230次Ⅱ区）、西北隅部（奈文研第230次Ⅲ区）、を発掘している。これらの調査の結果、奈良時代を通じて十五・十六坪が一体として利用され、十五坪の中心部では、3棟の大型東西棟建物（SB5914・5915・5916）の両側に南北棟建物SB5913・5917を対称に置くという、平城宮・京で例の少ない建物配置が判明し、公的施設の可能性が提議されている。

今回の調査地は、第118—8次調査地と第230次Ⅰ・Ⅱ区の間であり、敷地の東西約70m、南北約25mで、東端部に東一坊大路西側溝、西端部に坪の中心部建物群の東脇殿SB5913の一部がかかると想定できた。建物建設予定地は敷地の中央部で、ここに東西20m、南北16.5mの調査区（東区）、SB5913の北延長部に南北16m、東西4mの調査区（西区）を設けた。東一坊大路西側溝推定地には下水管が通っており調査できなかった。

### 2 遺構

調査区の基本層序は、上から盛土（100～120cm）、水田耕土（20cm）、床土（20～25cm）、瓦を多量に含む遺物包含層（15～20cm）があり、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面の土質は調査区各所で異なるが、平城宮東朝堂地区と東院地区が乗る2本の尾根の間の谷筋に堆積した土であって、厚さ5～10cmで色調の異なる粘土ないし粘質土層が何枚も重複して形成されている。遺構検出面の標高は、東区の東南端60.80m、東北端60.95m、西南端60.90m、西北端61.00m、西区南端61.05m、北端61.10mであって、西から東へ、北から南への緩傾斜が見られる。当調査地の南約120mの第249次調査地との標高差は約50cmである。検出した主要な遺構は、古墳時代の竪穴住居1棟、奈良時代の掘立柱建物6棟、建物か塀か不明の掘立柱列3条、井戸1基などである。遺構どうしの重複関係はあるものの、東西両区に渡る時期区分はできず、個々の遺構の概要を記すにとどめる。

#### A 古墳時代の遺構

**SX06 a・b** 東区西南部。古墳時代の竪穴住居。一辺5.9～5.2mの方形。SX06 aの床面の深さは0.2～0.3mで、壁沿いに幅0.2m、深さ5cmの溝を巡らす。SX06 bは同位置で床を0.15mかさ上げし、壁沿いに深さ5～10cmの溝を巡らす。中央部が奈良時代の井戸SE07で破壊され、住居に伴う柱穴を検出できなかった。

#### B 奈良時代の遺構

**SB01** 東区東端の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、北4間分を検出した。北でやや東に振れ、SB02より新しい。柱間は桁行2.75m（9尺）等間、梁行1.8m（6尺）。柱掘形は一辺1～1.2mの方形で、深さは側柱が0.9～1m、妻柱が0.6m。柱をすべて抜き取っており、西側柱北端と北から2番目には礎板が残る。

**SB02** 東区東端の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、総柱建物か西廂付き建物の廂部分か不明である。北5間分を検出した。北でやや西に振れ、SB01より古い。柱間は桁行2m（6.5尺）等間、東西2.5m（8.5尺）。柱掘形は一辺0.8～1mの方形ないし1.4×0.8mの矩形で、西の柱列に矩形が多い。深さは0.8～1mで、柱抜き取り痕跡には通有の漏斗状のものと一見柱痕跡風の細長いものがある。後者は柱痕跡の可能性もあるが、内部の土質から抜き取り痕跡と判断しておく。

**SB04** 東区中央の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、北4間分を検出した。北でやや東に振れる。柱間は桁行2.9m（10尺）等間、梁行2.4m（8尺）。柱間の割に柱掘形が小さく、一辺0.35～0.55mの矩形で、深さは0.2～0.3m。柱をすべて抜き取っている。

**SB05** 東区西南部の掘立柱東西棟建物。4間以上×2間で南に廂が付く。東3間分を検出した。東でやや北に振れる。北側柱列はSB02の南妻と筋を揃え同時期の可能性がある。柱間は桁行2.4m（8尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間、廂の出は2.2m（7.5尺）。柱掘形は一辺0.35～0.6mの矩形で、深さは0.2～0.3m。柱をすべて抜き取っている。

**SE07** 東区西南部の井戸。掘形と枠の抜き取り痕跡を検出した。枠板をすべて抜き取っている。掘形は、遺構検出面では径3～3.6mの不整楕円形で、深さ0.5mから正円形となり、深さ3mの底面では一辺1.5mの隅丸方形となる。底に厚さ0.15mのバラス層があり、その上に枠を据えていたのであろう。枠は横板組と推定する。一段の高さを25cmと想定すれば遺構面までに11段が入る。抜き取り痕跡は掘形めいっばいの規模で、底面のバラス層上面に及ぶ。多量の平城宮土器Ⅱと草履1点、鉄製U字形鍬・鋤先1点が出土した。

**SX08** 東区西北隅の掘立柱柱穴2基。建物の東南隅か。柱間は2.3m（8尺）。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さ0.95～1.1m。柱を抜き取っており、抜き取り痕跡内に埴が入る。

**SB5913 a** 西区南端部。第230次調査Ⅳ区で検出した十五坪の中心部建物群の東脇殿。北妻の中央・西の柱穴2基を検出し、桁行8間と確定した。第230次調査では、掘立柱のaから礎石建ちのbに建て替えたと判明しているが、西区ではbは検出できなかった。柱間は西脇殿SB5917と同じであれば3m（10尺）であるが、今回検出の2柱穴では3.3m（11尺）の可能性もある。柱掘形は一辺1.3mの方形で、深さ0.9m。柱の抜き取り痕跡内に埴が入る。

**SX09** 西区南端部。SB5913の柱穴を切る柱穴2基。建物か塀か不明である。東で南に振れる。柱間は3～3.3m（10～11尺）。柱掘形は西側が1.3×0.95mの矩形で、深さ0.85m。東側が1.4×1.2mの矩形で、深さ0.9m。柱を抜き取っている。

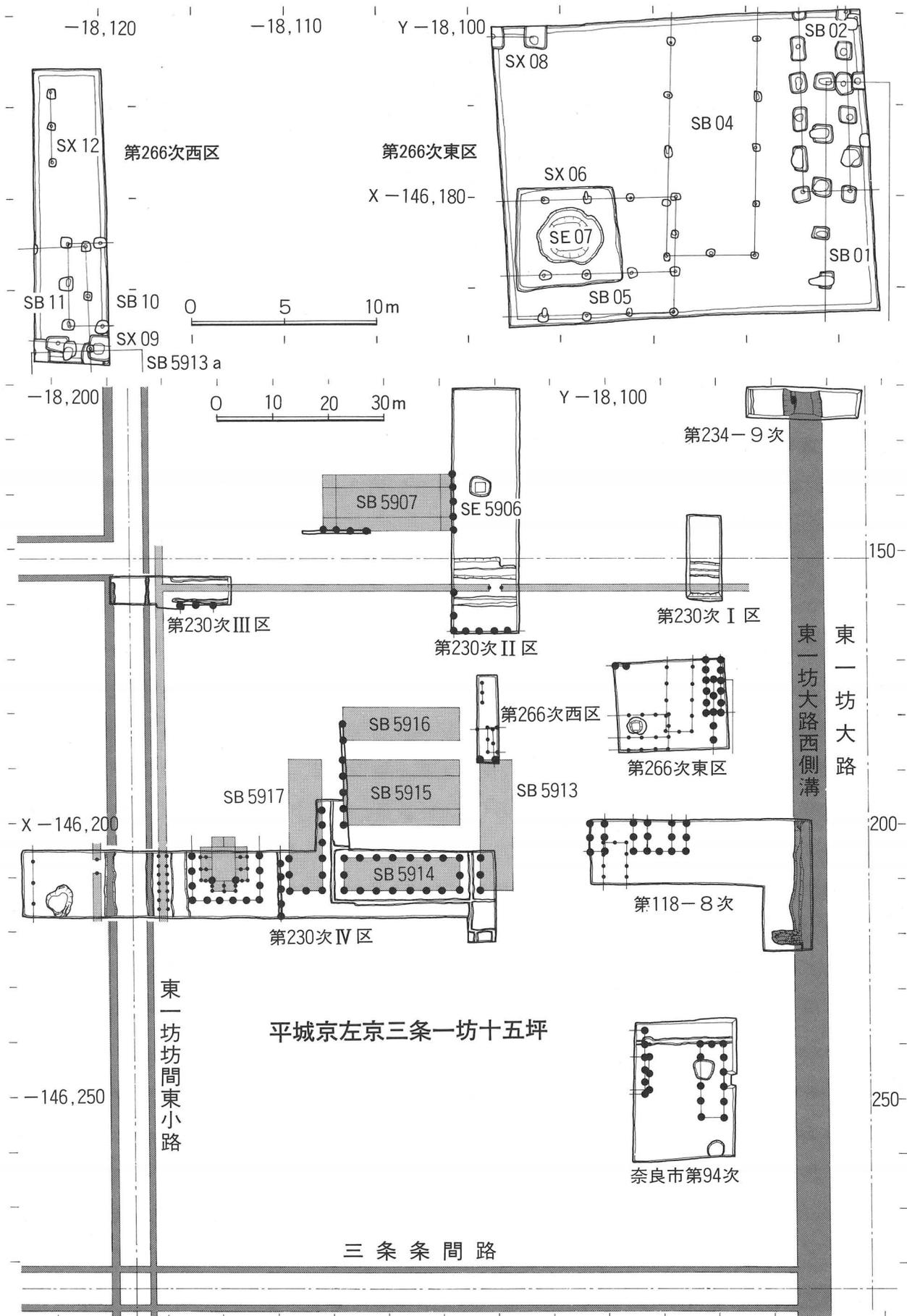


图34 第266次調査位置図 (下・1:1000)・遺構平面図 (上・1:300)

**SB10** 西区南半部の掘立柱建物。おそらく東西棟で3間以上×2間と推定する。西1間分を検出した。東でやや北に振れる。南側柱はSB05の南廂と、棟通りはSB05の南側柱と筋を揃え、同時期の可能性がある。柱間は桁行1.8m（6尺）等間、梁行2.25m（7.5尺）等間。柱掘形は一辺0.6～0.8mの矩形で、深さは0.3m。柱をすべて抜き取っている。

**SB11** 西区南半部の掘立柱建物。おそらく南北棟で3間以上×2間と推定する。北2間分を検出した。北でやや西に振れる。SB5913・SX09より新しい。柱間は桁行2.8m（9.5尺）等間、梁行2.8m（9.5尺）等間。柱掘形は一辺0.4～0.6mの矩形で、深さは0.3m。柱をすべて抜き取っている。

**SX12** 西区北半部の掘立柱柱穴3基。建物か塀か不明である。北でやや西に振れる。柱間は1.9m（6.5尺）等間。柱掘形は一辺0.4mの方形で、深さは0.3～0.55m。柱を抜き取っている。

### 3 遺物

**A 木簡** SE07の抜き取り痕跡から木簡5点（うち削屑3点）が出土した。主なものの釈文を掲げる。

① ・○ 奉上木□百二材  
・○ 和銅四年二月五日 (176)・30・2 019

② ・奉上  
・「𠄎𠄎」 (89)・46・3 019

①は木材の進上状か。平城遷都直後の和銅4年（711）の年紀をもつ。（古尾谷 知浩）

**B 土器** (図35) SE07の抜き取り痕跡の出土土器を報告する。全て平城宮土器Ⅱに属する。**土師器** 杯AⅠ・AⅡ(2)・AⅢ(1)、杯B(8)、杯B蓋、杯CⅠ(4)・CⅡ(3)、杯EⅠ・EⅡ(7)、杯F(6)、盤、鉢BⅠ(9)・BⅡ(5)、鉢X(10)、高杯、甕Aがある。杯Aには連弧暗文と放射二段暗文の双方が見られる。7は把手が1個しか付かず、珍しい例であり、4の底部全面には黒斑がある。10は鍋に器形・法量ともに似るが、胎土が異なり、盤や鉢に用いるものに近いより精選された胎土を使用する。外面に幅広の磨きを施し、把手上の肩部には「皆女」の墨書を横位に記す。また、5の底部にも「手布利」の墨書がある。これらの土師器は、黒斑を持つものを含むこと、高杯の暗文に放射二段と連弧を組み合わせるものがあること、杯Eや盤に把手を持つものが多いことなど、長屋王邸のSD4750出土土師器に様相が似る点もあり、注目される。

**須恵器** 杯AⅡ(14)・AⅢ、杯BⅡ(13)～BⅤ、杯BⅡ蓋(12)～BⅤ蓋、椀B(11)、壺B(16)・D(15)・K、平瓶、甕A・Cがある。12は転用硯として用い、16は美濃地方の製品である。  
(玉田芳英)

**C 瓦埴類** (表8) 軒瓦は軒丸瓦9点、軒平瓦6点で多くはないが、面積が4倍の第230次調査区での出土量（軒丸瓦34点、軒平瓦20点）と比して、特に少ないとは言えない。型式・種は

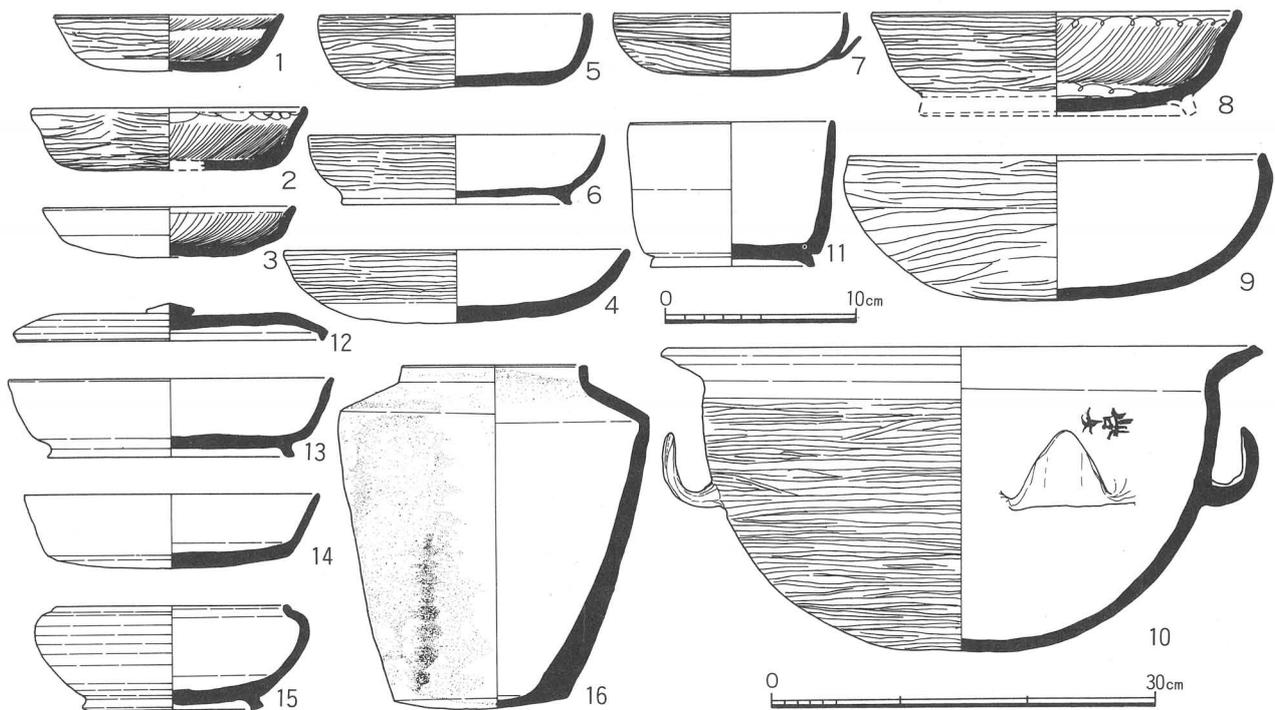


図35 SE07出土土器 1 : 4、10のみ 1 : 6

表8 第266次調査出土瓦埴類集計表

| 軒丸瓦      |    | 軒平瓦      |    | 丸瓦      |     |
|----------|----|----------|----|---------|-----|
| 型式種      | 点数 | 型式種      | 点数 | 重量      | 瓦   |
| 6012 新   | 2  | 6688 A a | 2  | 127.3kg | 平瓦  |
| 6135 A   | 1  | 6721 G   | 2  | 1,300   |     |
| 6282 F b | 1  | I        | 1  | 380.4kg | 埴   |
| 6308 B   | 1  | 型式不明     | 1  | 3,774   |     |
| 6311 A a | 1  |          |    | 120.0kg | 125 |
| 型式不明     | 3  |          |    | 125     |     |
| 軒丸瓦計     | 9  | 軒平瓦計     | 6  |         |     |

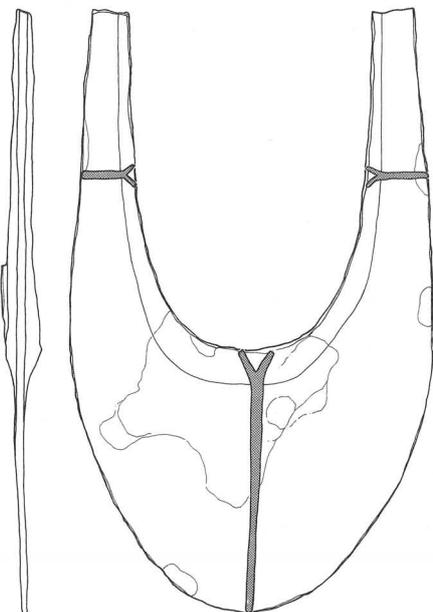


図36 SE07出土鉄製鋤先 1 : 4

第230次調査区出土品と類似し、平城宮軒瓦編年Ⅱ期前半のものが多く、Ⅱ期後半～Ⅲ期のものが次ぐ。東区・西区ともに遺物包含層から多量の丸瓦・平瓦・埴が出土した。230次調査区と比して、面積は24%、丸瓦重量は24%、平瓦重量は29%だが、埴重量は49%であって、相対的に埴が多い。ただし今回の調査区に埴を使用した施設は考えにくく、坪の中央部から廃棄されたのであろう。第118—8次調査区でも埴が多く、平城京域としては特殊な坪である。

**D 鉄製品** SE07の抜き取り痕跡から鉄製鋤先1点が出土した。鍛造製のU字形刃先で、内側縁に断面V字形の溝を作り出す。長さ32.2cm、幅19.2cm。刃部に使用による摩滅や研磨痕が無く、板状を呈することから、未使用品と考えられる。全長が大型の部類に属し、内縁下端か

ら刃部先端までの長さが14cmと、全長のほぼ半分に達するほど長いことも、未使用で消耗していないことと関連するだろう。木製の身部を装着した痕跡も見られないことから、未使用の刃先のみを井戸内に遺棄もしくは埋納したと考えられる。伯耆国庁跡でも、本例と類似する形状の大型鍬・鋤先が、未使用の状態です枚まとまって小土坑から出土しており、興味深い。

(加藤真二)

#### 4 まとめ

十五坪の東北部の様相がより明確となった。第230次調査で、奈良時代を通じて十五・十六坪を一体として使用し、十五坪の中央やや西寄りに中心的建物群を置いたこと、この中心的建物群は、掘立柱から礎石建ちへの造り替えはあるものの、基本的配置は不変であったことが判明している。一方、当調査と第118—8次、奈良市第94次の成果で明らかになった坪の東半部の様相は中心部とは異なる。建物が中・小規模で配置が整齊ではなく、位置や規模を変えての建て替えを行っており、大型の井戸もある。十分裏付けられているわけではないが、厨などの付属施設ではなかろうか。中心的建物群を東一坊大路に面した坪の東半にではなく、小路側の西半に置いたのは、平城宮に近い側が正面で、そちらに寄せたのであろうか。

十五坪の中心部建物群の東脇殿SB5913の規模が確定した。桁行8間で北妻を正殿SB5915の北廂に揃える。SB5913の北側には同時期の大型建物はなく、中心部建物群の配置は、正殿SB5915・南殿SB5914、脇殿SB5913・5917をロ字形に配し、その北に北殿SB5916を独立させたことが判明した。調査前にはSB5913の北妻がSB5916の北側柱筋までのびて、SB5913・5914・5916・5917でSB5915を囲む飛鳥石神遺跡A—3期(斉明朝)東区画に類似した配置かとも想定したが違っていた。ただし、平城宮・京の官衙や邸宅の中核部で、左右対称の建物配置が見られる場合、正殿の前面は開放させるのが普通で、本例の場合、①に述べたように南北どちらが正面か問題があるが、いずれにせよ東西棟で閉じるのは珍しい。こうした配置は、石神遺跡のほかは飛鳥雷丘北方遺跡などに限られ、遺物の項に記した瓦磚類の多さとも相まって、十五坪の特殊な性格を示している。

第230次調査では、奈良時代を通じて十五坪中心部建物群SB5913～5917が存続したと考えたが、SB5913については、再検討の余地がある。西区にはSB5913より確実に新しい2時期の遺構がある。SB10はSB5913と重複しないが近接し、共存は考えにくい。SB10とSB5913との新旧関係は不明であるが、いずれにせよ西区の中で4時期の変遷が考えられる。中心部建物群の存続期間については再考を要しよう。

井戸SE07は、抜き取り痕跡から出土した土器(平城宮時Ⅱ)・木簡(和銅4年(711)の年紀あり)からみて、奈良時代の初期、おそらく設けて間もなく廃絶している。別の井戸に機能を移したのだろうが、第230次調査区Ⅱ区のSE5906は規模(枠の内法一辺1.8m)・掘削時期(奈良時代後半)からみて後身ではない。

(岩永省三)

II-7 右京三条一坊十坪の調査 第258-10次調査

倉庫建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は、平城宮若犬養門の南方約170m、秋篠川旧流路の右岸に位置し、西一坊坊間路西側溝想定位置に近接する。当初、東西約11.5m、南北約6mの発掘区を設定したが、排土地が限られていたため、南北を約2m縮小した。調査地の基本的層序は、厚さ約40~50cmの置土、旧床土の下、現地表下約50~60cmで灰褐砂ないし黄灰粘土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は約64.7mである。

検出した主な遺構は、斜行溝2条と土坑2基などである。土坑SK01は発掘区の東南隅でその一部を検出した南北2.6m以上、東西2.3m以上の不整形な土坑で、少量の瓦片と須恵器片が出土した。土坑SK04は発掘区北辺で検出した径約45cmの小土坑。少量の弥生土器片が出土した。斜行溝SD02は幅約3.5m、深さ約1.1mで、北東から南西の方向に流れる。第Ⅲ~Ⅴ様式の弥生土器が出土した。溝SD03は斜行溝SD02より古い下層の溝。大部分が斜行溝SD02と重複しているため、規模や流れの方向は明らかにしえないが、斜行溝SD02の東側の遺構検出面である灰褐砂は、土層断面の観察から、溝SD03の堆積層と考えられ、斜行溝SD02の底での知見をあわせれば、調査地において、斜行溝SD02と交叉する位置関係であった可能性が高い。

これらの弥生時代の遺構は、平城宮西南隅の第14次調査や本調査地の北約110mで実施した第202-11次調査において検出した弥生時代の遺跡の広がりを示すものであろう。なお、西一坊坊間路西側溝は、右京八条一坊十一坪の調査においては、幅5.5~11.0m、深さも1.5mを越える規模を有しているが、今回の調査においても、第202-11次調査と同様、その痕跡すら検出されなかった。本調査地付近においては、位置を変えていたか、あるいは、下流域ほどの規模ではなかったため、削平された可能性が考えられよう。

出土遺物としては、斜行溝SD02から、櫛描文にボタン状貼付文のある第Ⅲ様式の壺口縁部破片や叩き成形による第Ⅴ様式の甕などが出土しており、この溝が弥生時代中期から後期にかけて存続していたことがわかる。図示したのは、底部を欠失するが、ほぼ完形の第Ⅲ様式の長頸壺で、外面の胴部上半から頸部にかけてと口縁部内面にハケ目が残り、胴部上半はヘラ状工具による縦位のナデを施す。(小林謙一)

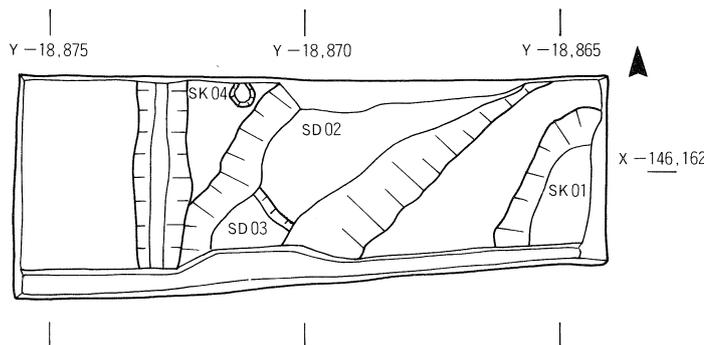


図37 第258-10次調査遺構平面図 1:150

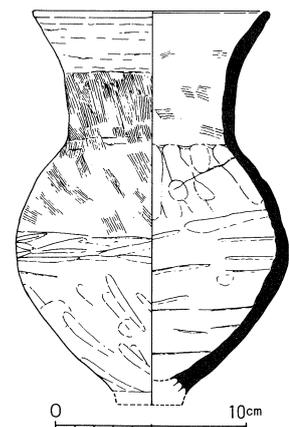


図38 SD02出土弥生土器 1:4

1 はじめに

大乗院は、寛治2年（1088）、興福寺の門跡寺院として創建された。当初は、現在の奈良県庁西南角付近にあったが、平重衡の東大寺・興福寺焼き討ち（1180）に罹災後、当時元興寺の子院・禅定院があった現在地に移った。その後、2度の火災を被るが、宝徳3年（1451）の火災以後の尋尊大僧正による復興の様子は、『大乗院寺社雑事記』に詳しい。さらに、江戸時代の状況は、隆遍僧正の『大乗院指図』や隆温大僧正の『大乗院四季真景図』などによって伺うことができる。明治時代以後は、建物が撤去されて荒廃し、一時は小学校の敷地になったり、水田化したり、あるいは道路敷きとして切り取られるなどの経過をたどった。1958年には、旧国鉄の宿舎が敷地内に建設されたが、一方この年文化財保護法による名勝指定を受け、1974年には（財）文化観光資源保護財団〈現・（財）日本ナショナルトラスト〉により園池修理事業が行われている。

このたび、奈良市立庭園文化館が旧大乗院敷地の南東隅に建設されるのにあわせて、大乗院庭園の整備がおこなわれることになった。本調査は、この庭園整備にあたっての事前調査である。調査期間は、第260次調査が1995年7月6日から9月8日、第268次調査が1996年2月26日から3月21日であり、また調査面積は、それぞれ約330㎡、約210㎡である。なお、これまで大乗院園池については、奈良市が平成2・3年度に調査を行い（元興寺旧境内第29・32次調査）、江戸時代と中世の2時期の池南岸中部の汀線を、現在の汀線より15～20m南で検出している。

2 遺 構

A 園池南岸西調査区（I調査区・図42）

園池南岸西端から出島にいたる範囲で設定した調査区。面積約200㎡。調査区の基本的な層序は、地山・中世の造成土・近世の造成土・近現代の造成土および攪乱土・表土であり、調査



図39 大乗院位置図 1:10000

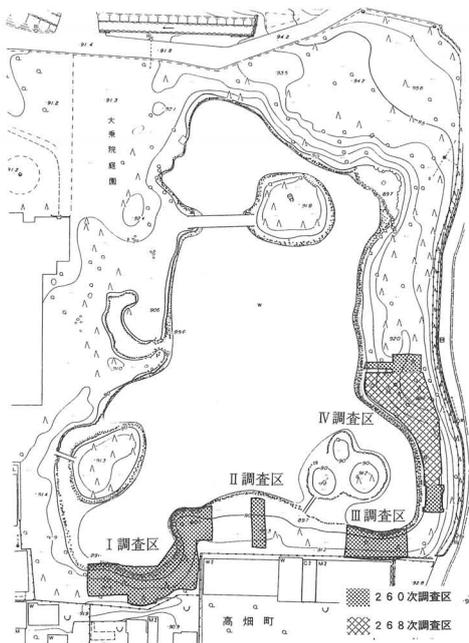


図40 調査区配置図

区西端付近では地山と中世の造成土の間に平安時代遺物包含層が入る。また、池の中にあたる部分では、池の堆積土が見られる。なお、中世および近世の造成土はそれぞれ灰褐粘質土・褐色砂質土を基本とするが、土層は場所による変異が大きい。検出した遺構は、中世の池（SG01）、近世の池（SG02）のほか、中世造成土上の流れ（SX03）である。以下、それぞれの遺構を概説する。

**SG01** 灰褐粘質土を最上面として造成された陸部が、比較的急勾配で北方に落ち込み、池岸となる。この灰褐粘質土は、近世以降と明かに判断できる遺物を含んでいないため、中世に造成された陸部と推定できる。汀線付近は、近世の池岸により攪乱されているため、護岸の様子は明かではないが、例えばY-14937では礫混じり暗灰砂質土が汀線に近い位置で検出されている（土層図b・図44、以下同）ことから、礫を用いた仕上げがなされていた可能性が大きい。池底の堆積土の状況から考えて、池の水位は90.0m前後と推定できるため、土層観察で得た汀線の平面位置は、Y-14946でX-147011～012付近（土層図a）、Y-14937でX-147012付近（土層図b）であり、さらにその東では汀線は南に後退し奈良市・元興寺29次調査で検出した汀線（Y-14919でX-147014～015付近）に取り付くもようである。なお、この調査区内での池底の標高値は89.5～89.6m前後である。

**SG02** 中世と推定できる陸部の上に褐色砂質土などで30～40cm積土して造成された陸部が北方に落ち込み池岸となるが、その勾配は汀線付近ではやや緩くなる。Y-14930～936付近は池の汀線が急に南に後退して緩やかな入江状になるが、このあたりでは裏込石を伴う護岸石積が部分的に施された状況が確認できた。これは、池水による岸の浸食を防ぐために、SG02の存続していたある時点で施工されたものであろう。汀線の平面位置は、Y-14946でX-147011付近（土層図a）、Y-14937でX-147012付近（土層図b）とほぼSG01と同位置、Y-14931でX-147013（土層図c）付近であり、さらにその東ではやや北に突出し（Y-14922でX-147009付近）、再び南に後退する。なお、森蘊は、現在の池南岸にある出島が室町時代の南中島に由来するとの見解を表していた（『中世庭園文化史』）が、この出島は、近世の遺物（伊万里焼の磁器片・江戸時代の燻し瓦）を包含するSG02の時期の池底堆積土の上に積土して造成されていることがわかった（土層図d）。おそらく近代のものと考えてよいだろう。

**SX03** 調査区西部の中世の陸部上面で検出した幅0.5～1.5mの素掘りの流れ状遺構。南南西から北北東方向に蛇行しながら流れ下る。砂ないし砂礫層が3層見られることから水が流れた時期が3時期に分かれるものと推定できる。

## **B 園池南岸中央調査区（Ⅱ調査区・図42）**

園池南岸中央付近に設定した調査区。面積約30㎡。この調査区は、全域SG01及びSG02の池底にあたる。池底は調査区南部では青灰粘土とその上にある暗灰粘質土、北部ではさらにその上にある灰褐砂・青灰砂礫で形成されており、標高は89.3～89.5mである（土層図e）。

### C 園池南岸東調査区 (Ⅲ調査区・図43)

園池南岸東端付近に設定した調査区。面積約50㎡。SG01及びSG02の池底と見られる灰色砂礫層を標高89.3m付近で検出した。この池底の上面には暗褐色の腐植土が10～15cm堆積している。なお、調査区南部X-147003～004付近以南では、この腐植土の上に青灰粘質土・暗灰（または黄灰）粘質土からなる斜面が形成され、調査区中央部付近ではこの斜面の北部（池側）に5～10cmの礫を含む青灰砂礫土が張り付けるように載せられていた（土層図f）。青灰砂礫土も含めたこの斜面はある時期の池岸であることは確かであるが、時期を確定する遺物等は出土していない。近世の池SG02の池岸の可能性も全くないわけではないが、奈良市・元興寺第29次および第32次調査による近世の池岸（Y-14890でX-147014付近）と照合すると、そう考えることは困難であり、やはり近代のある時期に施工されたものとするのが妥当であろう。

### D 園池東岸調査区 (Ⅳ調査区・図43)

園池東岸南側に設定した調査区。調査面積は、第260次調査として実施した北端の約40㎡、南端の約20㎡、第268次調査として実施した中央部約210㎡の計約270㎡である。基本的な層序はⅠ調査区と変わらない。検出した遺構は、中世の池（SG01）のものと推定される洲浜の石敷き(SX04)、近世～近代のものと推定される叩き漆喰の遺構(SX05・06・07)である。

遺構検出面は、現況の芝の表土および昭和48～49年の整備の際の置き土と見られる層を取りのぞいたところで、近世後期～近代の層とみられる暗黄灰砂質土層の上面である。これは、池の周囲に巡らされた盛土の上面と思われ、池に向かって急勾配で落ち込む斜面がある時期の汀線をなしていると推定される。この急斜面と現池汀線の間でSX04を検出した。また、東岸の汀線の層位確認のために、現在の汀線を横断する位置で断割り調査をおこなった。その位置は、中央畦畔の南面（X-146979.3・Y-14875.2とX-146977.2・Y-14868.7の2点を通る。土層図g）からおよそ80cmの幅で設定した。以下、検出遺構の概要および断割り調査の所見を述べる。

**SX04** 池汀線の急斜面から、緩やかな勾配で池底に向かう洲浜の石敷きと考えられる遺構（図41）。石は形や大きさがふぞろいな河原石で構成され、洲浜の敷き方も自然風であり、石が密に配されている。発掘区南半の第268次調査区西壁内側では池底に向かう石敷きの落込みが検出され、石敷きは急傾斜面から約2mの幅であることが確認された。なお、第268次調査では、洲浜から池底へ向けて落ち込む砂礫層で、10世紀末～11世紀前半の土師器が出土した。

**SX05・06・07** 調査区の北東部の暗黄灰砂質土層の上面より検出した、叩き漆喰の遺構。遺構は主に3つの部分からなる。一番南にあるドーナツ形の遺構(SX05)、SX05より北北西の方向に伸びる帯

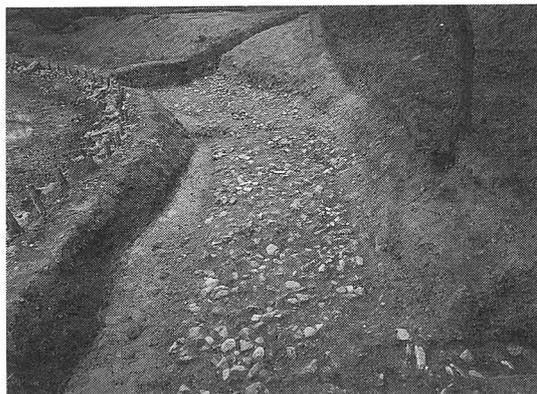


図41 VI調査区出土洲浜石敷き（南から）

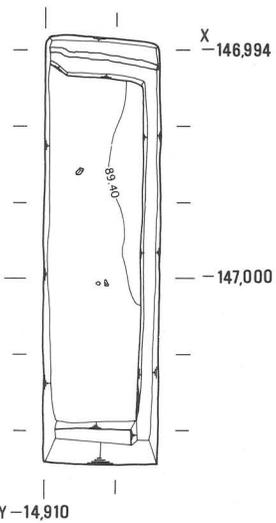
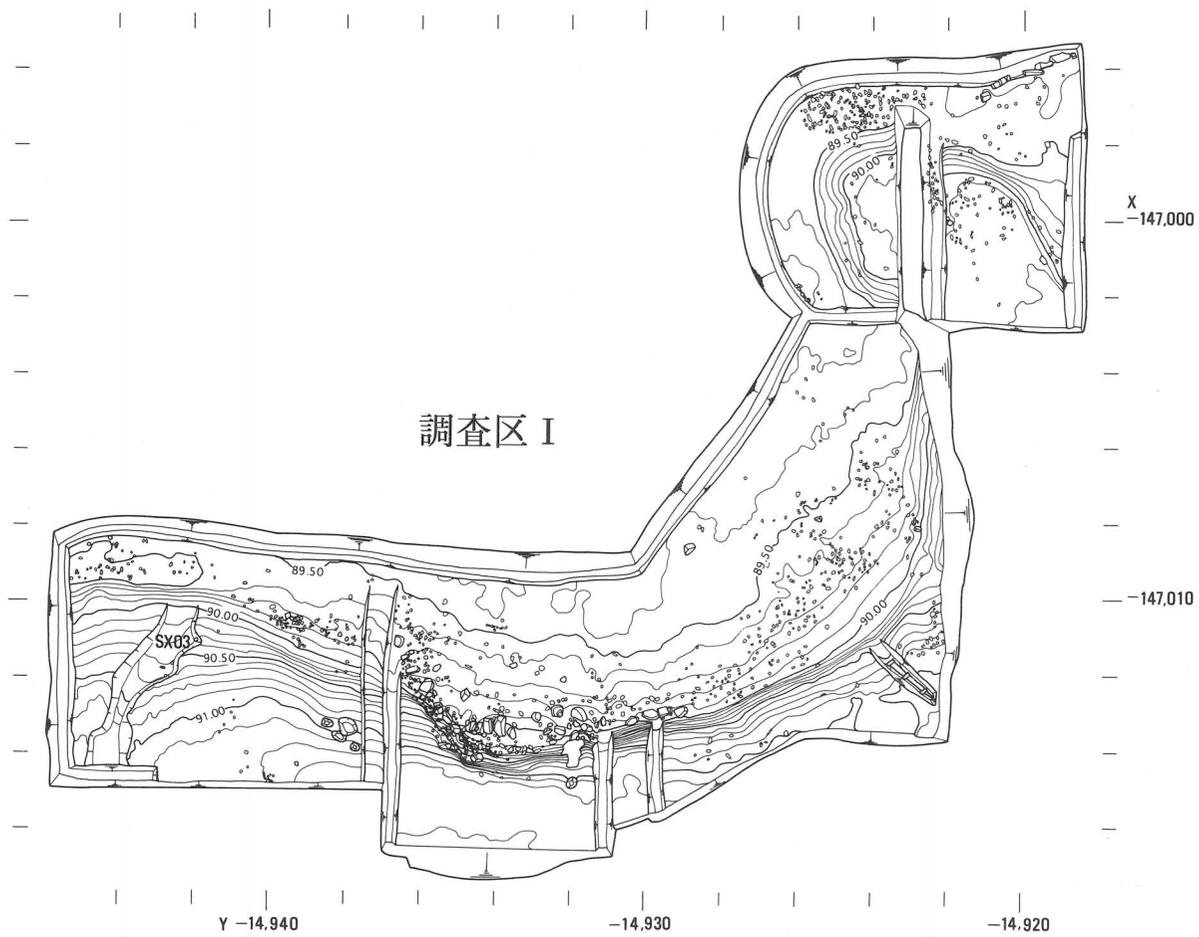
状の遺構(SX06)、SX05の北西の方向に3つないし4つ並ぶ矩形状の遺構(SX07)である。SX05の平面形は、内径約1.5m、外径約2.0mのドーナツ形を呈する。小池もしくは植栽樹の痕跡と推定されたが、断割り調査の結果、ドーナツ形遺構の地下部分の内外の土層に明確な違いは認められなかった。したがって、小池の縁ではありえないことが判明した。また、叩き漆喰は、暗黄灰砂質土層の上面に黒褐土を5cmほど敷いた上に薄く叩き占めたものであった。SX06は、漆喰の残存状態が悪く、はっきりとした輪郭を検出することはできなかったが、園路または何らかの境界を示すものと考えられる。SX07は、形が崩れているが石畳状のもので、一番北側の遺構の西側にガス灯の基礎と思われる円筒形の金属遺構(SX08)があることなどから、近代に使われていた園路と考えられる。ただし、園路の成立は近世にさかのぼる可能性もある。じっさい近世の「大乘院四季真景図」には、調査区に相当する東岸に園路やいくつかの建物が描かれている。このことから、SX05・06・07は、近世に成立した園路を近代以後も継続的に使用した可能性がある。

**中央畦畔南面断割り調査** 土層図gに示したとおり、土層断面は、表土および近・現代の置土層を除くと、大きく3つの時期に分けることができる。下層より、池尻から陸地の地中に向かって石敷きが続いている層(第1層)、X-14872付近で落込みをなし、第1層にほぼ平行に50~60cmほど盛土した層(第2層)、第2層にさらに30~50cm盛土した層(第3層)である。

**第1層** 調査区を出てさらに東側に続いている。断割り断面でみる限り、この石敷には池に向かって3つの落込みが確認される。落込みの端点の座標・標高は西側からそれぞれ、X-146979・Y-14875付近で89.6m(落込みa)、X-146978・Y-14873付近で89.8m(落込みb)、X-146977.5・Y-14871付近で90.5m(落込みc)である。石敷上面の平均勾配は、落込みa以西は約10%、落込みa-b間は約3%と比較的緩やかであるが、落込みb-c間と落込みc以东はともに約30%の急勾配であった。また、落込みb-c間には上面が標高約90.5mの砂の堆積層がみられる。これらのことから、大乘院庭園の池が、園池として利用された当初、あるいはそれ以前に自然池として存在した時期には、東岸には急勾配の河原石敷きが存在し、池の水位は標高90.5mを越えていた可能性がある。この場合、汀線は落込みc(X-146977.5・Y-14871)付近であると考えられる。さらに、地山の層を確認するため、断割り調査区の東端および中央部を掘り下げた。このうち、東端の深掘りトレンチでは、およそY-14869~14870付近で標高90.6~90.7mにやや大型の河原石層を検出した。中央部の深掘りトレンチは標高88.2m付近まで掘下げ、小石を多量に含んだ層をいくつか確認した。この両方のトレンチのいずれの層からも遺物は検出されず、人工の層と自然の層をはっきりと区別することはできなかった。

**第2層** 砂混じり小石層あるいは黄褐土混じり灰褐砂質土を最上面として造成された陸部が、比較的急勾配で西方に落ち込み、池岸を形成している。汀線付近は下層より褐色砂および灰色砂混じりの礫の堰により護岸を形成している。池底の堆積土の状況から、この時期の池の水位

調査区 I



調査区 II

図42 第260次調査遺構平面図 1 : 200

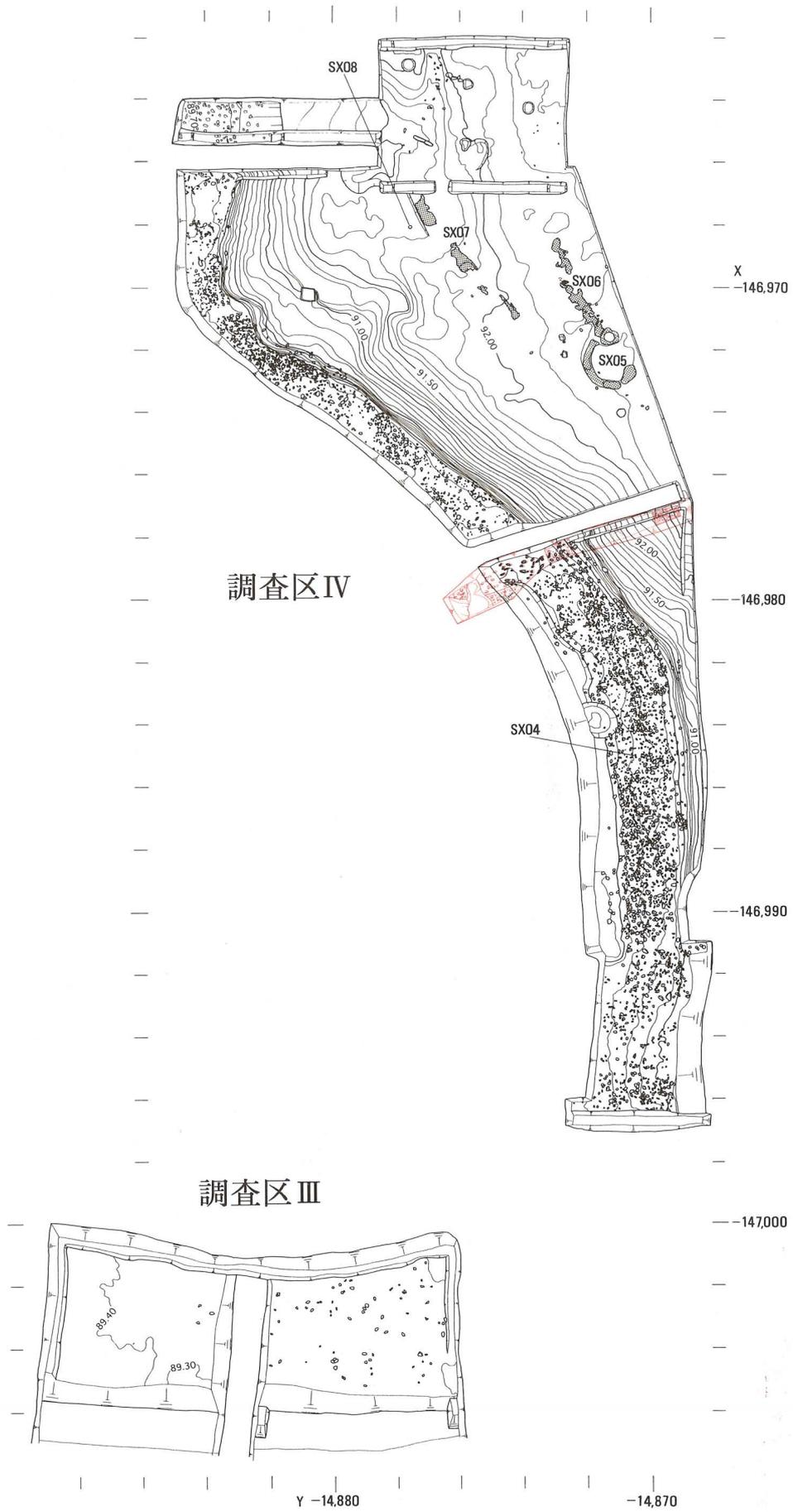


図43 第268次調査遺構平面図 1 : 200

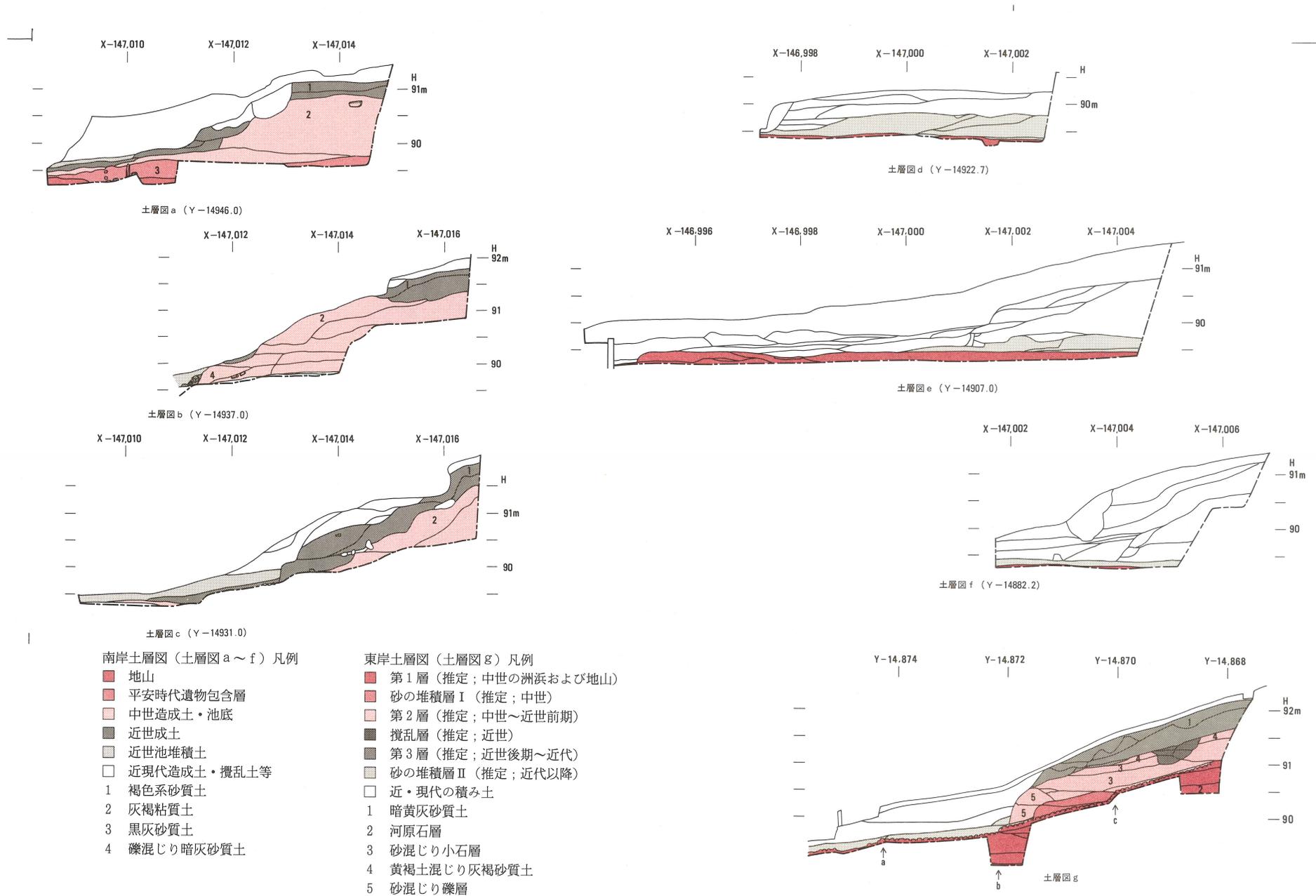


図44 南岸・東岸土層図 (1 : 100)

は標高90.0m前後とみられるため、土層断面観察位置における汀線の平面位置は、急斜面の下端（X-146978・Y-14872）付近と推定できる。

第3層 第2層の上部に褐色砂質土などで30～50cm積み土して造成された陸部が西方に落ち込み池岸となるもので、基本的な勾配はSG04と大きく変化しない。最上面は暗黄灰砂質土である。汀線付近の護岸は第2層の仕上げおよび位置をそのまま踏襲しているものと考えられる。

### 3 遺物

瓦：池埋土から、奈良時代の元興寺で用いられた軒丸瓦（6201A）が一点出土した。そのほかの中近世の瓦出土状況は表9のとおり。

土器：I調査区西端の黒灰砂質土およびIV調査区の池底で、平安時代の土器を出土した。

### 4 まとめ

今回の調査で得られた成果の要点を奈良市の調査の成果もふまえながらまとめてみると、以下の通りである。

（1）池南岸の汀線は、中近世をつうじて、緩やかな出入りを見せながらも比較的単調に東西方向にのびていた。

（2）室町時代の園池の南中島である可能性を指摘されていた出島は、近世以降、おそらく近代のものであることが明らかになった。

（3）池東岸は、おそらく園池の成立当初においては、現在検出した範囲よりも広く洲浜石敷きが施されていた可能性がある。この洲浜石敷きは、自然堆積の砂礫層に手を加えて仕上げられたものと思われる。その成立年代は不確定ながら、第268次調査区で検出した洲浜石敷上面から10世紀末～11世紀前半の土器が出土したことにより、大乘院移設以前、すなわち弾定院の段階に園池の成立がさかのぼる可能性が生じてきた。この点は、注目に値する。

今回の調査では、汀線など大乘院庭園園池の意匠変遷についていくつか確認されたが、時期の推定に関しては、まだ直接的根拠が十分ではない。園池の発掘調査は今後4年間継続して実施される予定であり、今後の調査に期待される場所は非常に大きい。なお、最終的には、今後の調査成果も併せて調査報告を作成する予定である。（小野健吉・浅川滋男・平澤 毅）

表9 260・268次出土瓦集計表

| 軒丸瓦   |    | 軒平瓦  |    | 丸瓦     |         |
|-------|----|------|----|--------|---------|
| 型式種   | 点数 | 型式種  | 点数 | 重量     | 30.3kg  |
| 6210A | 1  | 中世   | 2  | 点数     | 190     |
| 中世    | 1  | 近世   | 16 | 平瓦     |         |
| 中世巴   | 9  | 近世無文 | 2  | 重量     | 235.8kg |
| 近世巴   | 14 |      |    | 点数     | 1,503   |
| 近世無文  | 1  |      |    | 道具・その他 |         |
| 菊丸    | 1  |      |    | 軒棧瓦    | 1       |
| 小型菊丸  | 5  |      |    | 近世鳥衾   | 2       |
| 巴     | 1  |      |    |        |         |
| 型式不明  | 1  |      |    |        |         |
| 軒丸瓦計  | 34 | 軒平瓦計 | 20 |        |         |

II-9 薬師寺講堂の調査 第263次

1 はじめに

薬師寺では創建当初の伽藍を復元するという計画のもとに、金堂・西塔・中門・僧坊・回廊などにつづき、講堂も再建することにしており、そのための正確なデータを得るため、今回、創建講堂の全域について発掘調査を行うこととした。調査面積約1480㎡。調査は10月2日に開始し、1996年1月25日に終了した。

**講堂の変遷** 長和年間の『薬師寺縁起』によれば、講堂について次のように記されている。

講堂一字、重閣、七間四面（裳階あり、高さ一丈三尺六寸）。長さ十二丈六尺、広さ五丈四尺五寸、柱の高さ二丈五寸。南には戸なし、東西は各戸一間、北は戸三間、自余は皆連子（今は壁）。繡仏像一張を安置す。高さ三丈、広さ二丈一尺八寸、阿弥陀仏像ならびに脇士、菩薩天人等すべて百余体を繡し奉る。

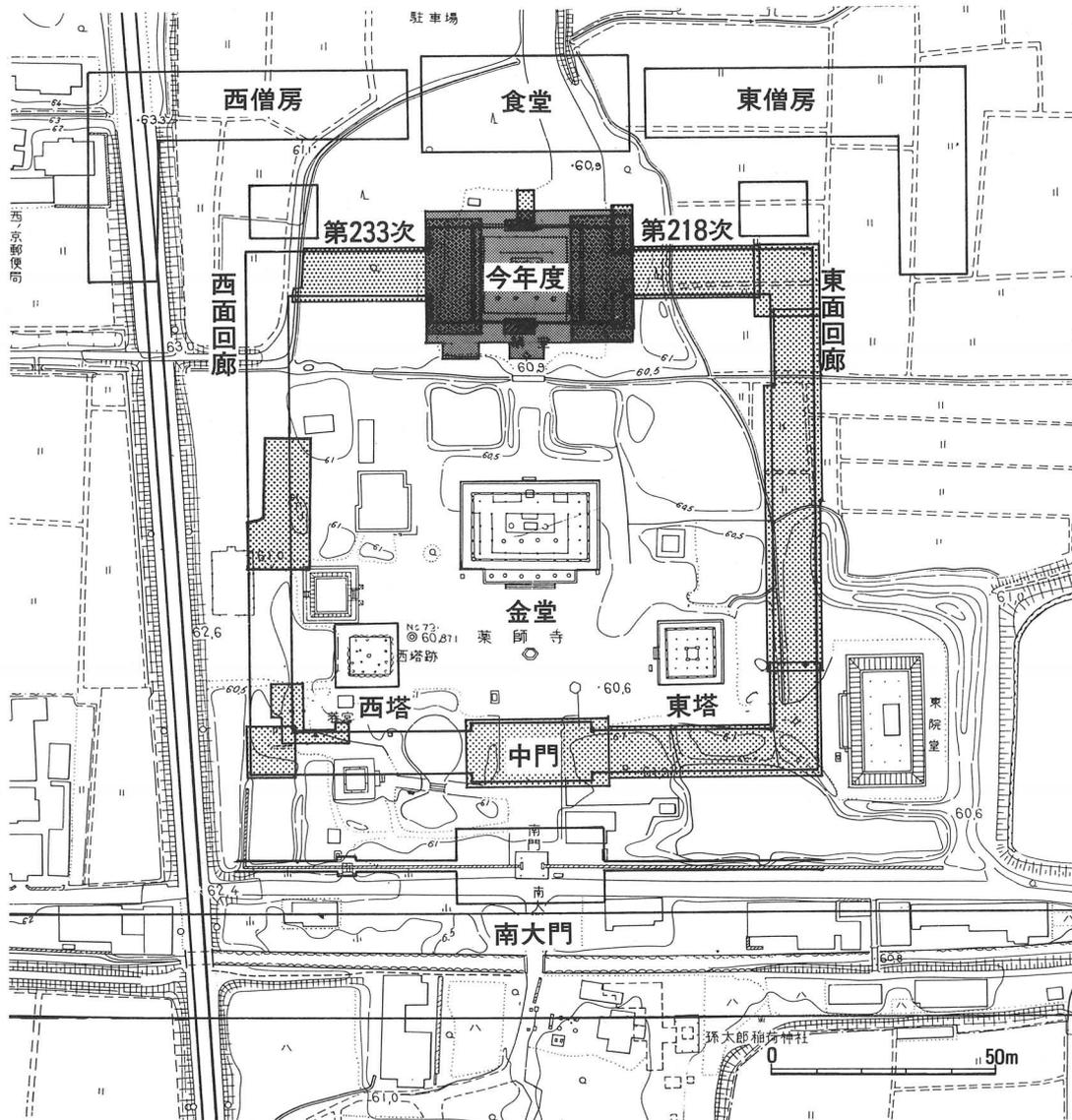


図45 第263次調査位置図

この縁起は11世紀の成立ではあるが、「流記帳いわく」として焼失以前の史料を引用しているから、部分的に誤りを含むものの、一応創建当初の講堂についての記述と見てよい。創建講堂の造営については史料に明記されないが、他の堂と同じく天平年間には完成していたと見られる。ところがその講堂は、天禄4年(973)に焼失し、貞元3年(978)に再建された。享禄元年(1528)に兵乱により再び焼失、その後ながく再建されなかった。18世紀末にいたり、安永9年(1780)に西院にあった金銅の薬師三尊を講堂跡に移し、翌年仮屋上棟。それ以来本格的な再建の動きがはじまり、ようやく嘉永5年(1852)に講堂が完成し、現在にいたっている。

**従来の調査** これまでに行われた講堂に関わる発掘調査には、1968～71年に近畿大学の杉山信三研究室による小規模な調査があり(『薬師寺伽藍の発掘調査1968-1971』)、これをうけて1990年に北面回廊および講堂東端部(第218次)、1992年には同じく西端部(第233次)について実施し、次のような成果をあげている。

- ①基壇の規模は南北76尺(22.5m)で、東西は147尺と推定できる
- ②建物は身舎が七間×二間で四面に廂があり、裳階の有無は未確定
- ③柱間寸法は身舎の桁行15尺、梁間17尺で、廂は10尺の出となる。裳階がある場合は6.25尺か

①は第218次の成果による『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1991年、以下『1990概報』と略称)の見解である。②の裳階については『薬師寺発掘調査報告』(1987年、以下『薬師寺報告』と略称)では確認しておらず、存在を推定するにとどまっていた。『1990概報』では北側に1箇所の裳階とみられる礎石跡を確認したとするが、第233次調査では裳階の痕跡は全く残っていない(『1992概報』1993年)。③は第218次の発掘によって得られた寸法で、裳階の点を除き第233次でもこの見解を踏襲している。

したがって今回の調査では、これまでの成果を確認すること、裳階の有無などの課題を解決すること、さらに基壇の築成状況などのより詳細な点を明らかにすることを目的とした。

## 2 遺 構

### A 奈良時代の講堂

**基壇外装** 基壇は金堂と同じく凝灰岩製の束石を用いない壇正積基壇で、地覆石と羽目石の一部が残っている。基壇土は特に北辺中央付近の残りが良く、東西両端および南にゆくにしたがって後世の削平を受けている。凝灰岩製の地覆石は、上面幅が30cm前後、長さはまちまちで55cmから110cm、厚さは25cm前後である。上面には深さ1cm程のくり込みを入れて羽目石との仕口としているものがある。羽目石は北面中央階段より東に残っているが上面が摩滅しており、法量は確定できない。地覆石の下には平瓦を二ないし三枚(厚さ約10cm)敷いている。その中に本薬師寺に使用された軒平瓦6641-Hが含まれており、地覆石に改装の痕跡もないことから、基壇は創建当初のものと考えられる。また、かつて中門東の南面回廊部や、第233次で検出した北

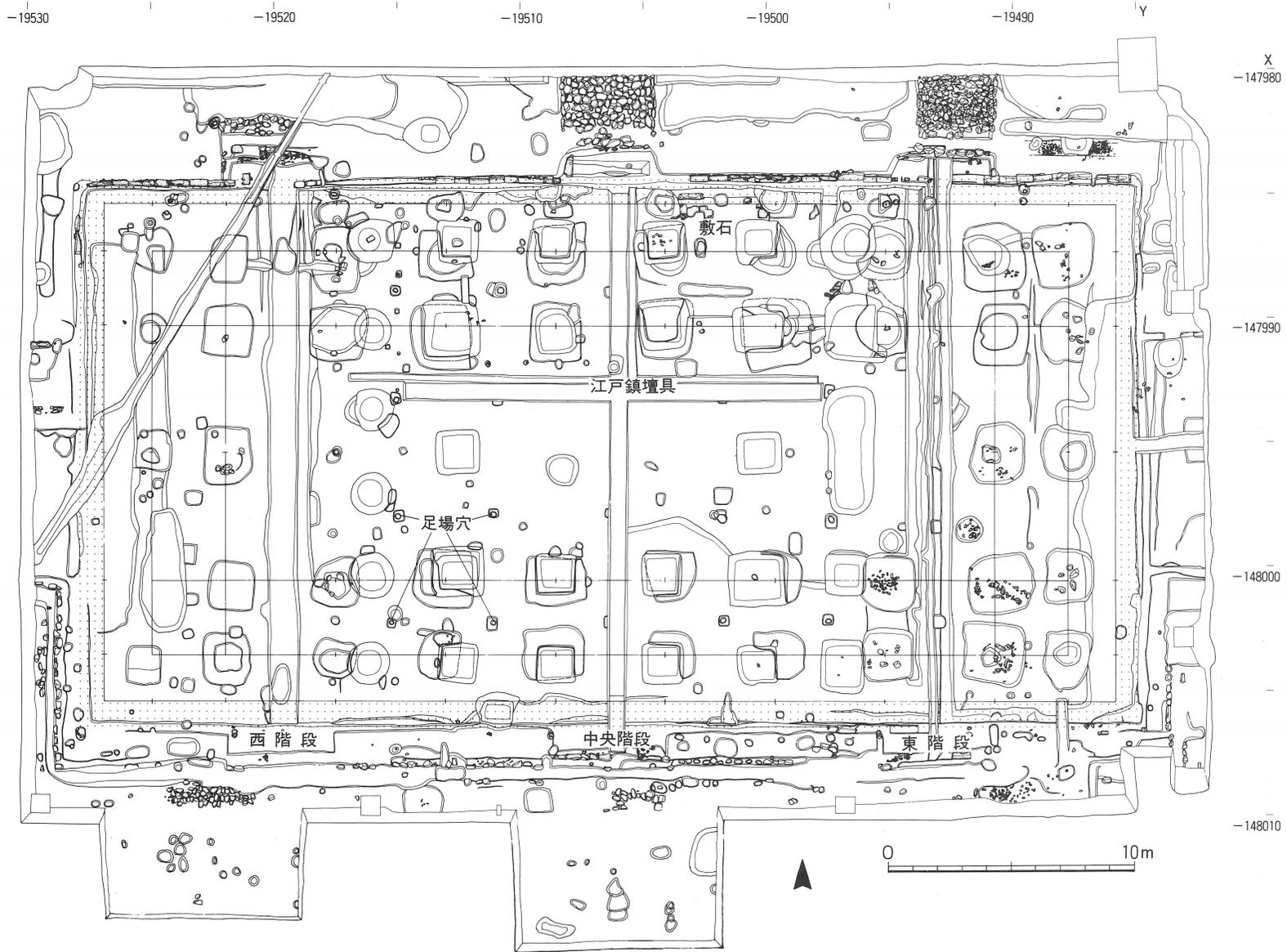


図46 第263次調査遺構平面図 1 : 250



図47 講堂基壇南北断断面（西壁）

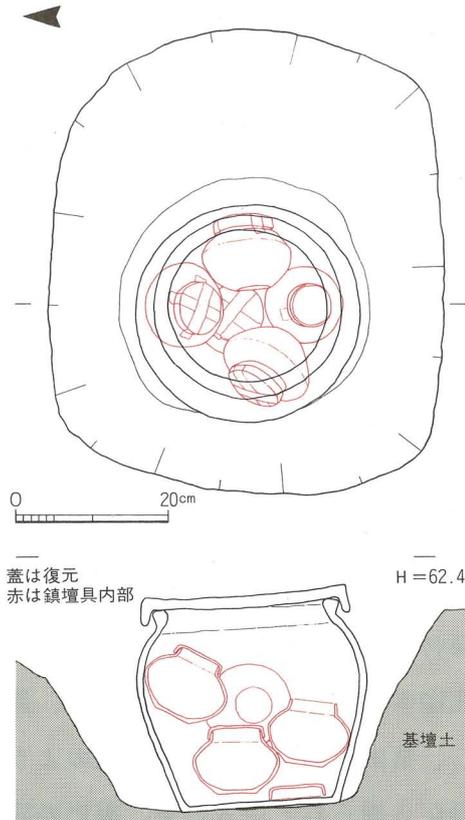


図48 江戸鎮壇具出土状況 1:10

面回廊の単廊部分の瓦敷きなどもこうした地覆石下に敷かれた瓦と認められる。

地覆石および平瓦のない部分についても、地覆石を据えるときに基壇縁をカットした線が残り、それらによって基壇規模が判明する。その規模は東西43.3m、南北22.2mとなり、これを『薬師寺報告』で採用している薬師寺の造営尺（1尺=29.6cm）を用いると東西146尺、南北75尺となる。したがって、従来の成果を若干修正することになる。なお、『薬師寺報告』では南大門・金堂などの主要堂塔の遺構の座標を示し、そこから伽藍中軸線を計出しているが、講堂の座標はこれからかなり外れてしまう。実際に検出した遺構による講堂の中心の座標は  $X = -147995.5$   $Y = -19506.3$  となり、これでは『薬師寺報告』に記す金堂の中心座標 ( $X = -148052.4$   $Y = -19507.7$ ) より1.4mも東に寄ることになる。そこで遺構の直上に復元された現金堂を再測量してみると、その中心はおおよそ  $X = -148052.3$   $Y = -19505.6$  となり、講堂の座標との関係で不自然ではない。したがって、『薬師寺報告』で発掘時の座標を国土座標に変換する際に誤りが生じたのであろう。『薬師寺報告』の測量成果については再検討が必要である。

**基壇の築成** 今回の発掘部分はちょうど江戸時代の講堂基壇の下に「保護」されていたために残りがよく、重要な点が明らかになった。講堂周辺の地山は灰白色ないし淡い灰茶色の砂土で、講堂北辺から東辺にかけては奈良時代以前の流路の埋土と見られる灰黒土があり、これらの上におおよそ20~30cmほど整地を行い、基壇部分はその上に版築を行っている。掘込地業は認められない。版築はもっとも残りの良い部分で約30層、120cmに及ぶ。版築が約100cmに及んだ段

階で礎石を据え付け、さらに20cmほど版築をして上面を整える。基壇北端の中央やや東に、凝灰岩が5個据わっている。これは基壇上面の化粧であり、当初の敷石と判断した。敷石の方向からみて布敷である。したがって地覆石下端から敷石上面までの基壇高が約100cmとなる。

基壇版築の上面に近い部分には、厚さ約2cmのベンガラを敷いた真っ赤な層があり、その上には凝灰岩の粉を敷き詰めた白土の層が基壇一面を覆っている。これは版築の効果というよりも、独特の色彩に意味があり、版築の段階で何らかの祭祀を行ったのではないかと考えられるが、なお類例の検討が必要であろう。

**礎石** 創建当初の講堂は礎石建ち瓦葺きの建物で、礎石の据付穴と抜取穴を49箇所検出した。礎石位置が江戸時代の講堂と重複するものが多いため、原位置に礎石は1個もなく、根石が残るのも一部に限られる。課題となっていた裳階の有無については、北面に6個所の礎石跡があり、他は削平されているものの四面に裳階がめぐっていたことがわかる。

身舎と庇の礎石据付掘形は一辺2.5m前後の隅丸方形で、深さは基壇土が最もよく残っている北端中央部で55cmを測る。一方、裳階の礎石掘形は直径1.3mの円形で、深さは65cmある。ただし、裳階の掘形は、身舎と庇のように基壇築成途中で掘形を掘るのではなく、版築終了後に上面から掘られているので、掘形の底のレベルとしては裳階のほうが若干高い。

礎石抜取穴の埋土は、江戸の基壇土と同じであり、礎石のうちのいくつかは19世紀まで原位置をとどめており、江戸の講堂再建時に抜き取られたと推定される。江戸時代の様子を描いた薬師寺伽藍古図の中には、講堂の位置に基壇のみ描き、そこに柱位置を示すものがあるが、これは当時における礎石の残存を示すのであろう。

また、礎石跡の間で各礎石掘形の四隅の方向に掘形一辺40cmほどの方形の掘形の小柱穴が並ぶ。これは講堂建設時の足場穴であろう。

**建物規模** 以上から、講堂の規模は次のように確定できる。平面形は四面庇にさらに裳階がつく形で、身舎は桁行7間梁間2間、桁行柱間寸法は15尺等間、梁間は17尺等間である。庇の出は桁行、梁間方向ともに10尺となる。裳階の出はこれまで6.25尺と推定されてきたが、6.5尺と見るべきである。したがって桁行総長が138尺、梁間67尺で、さきの基壇規模と合わせ考えると、基壇の出は4尺となる。

**階段** 階段は南北にそれぞれ3カ所ずつある。凝灰岩製の階段の地覆石が北面には残っている。

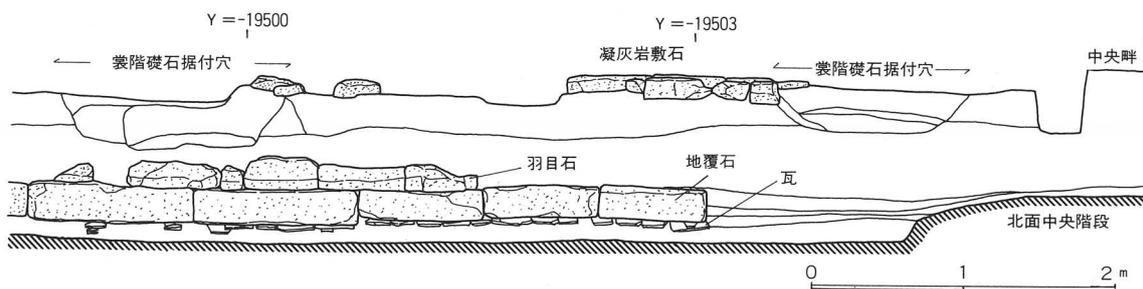


図49 基壇北面立面図 1:50

階段の出は110cm（3.7尺か）である。基壇版築後に階段部分も含めて、長方形にカットして地覆石を据え、それから階段を造り足している。したがって、階段の中に隠れる部分にも一部地覆石がのこっている。とくに南面の東階段部分の地覆石はほとんど摩滅していない。北面中央階段では西側の凝灰岩製耳石が残る。

**基壇の周囲** 基壇縁から外側に約80cm離れて玉石組の雨落溝がめぐる。溝は西南部分で最も残りが良く、内のりで30cmを測る。また北側には、階段の位置に対応するように、玉石敷きの通路が3カ所があり、北の食堂に続いている。石敷通路の幅は東が315cm、中央が375cmで、西は確定できない。南側には玉石の通路はない。

雨落溝を構成する玉石は、北側の階段の部分では階段地覆石の上ののっており、また、講堂西南部分では石組溝の外側に雨落溝側石の抜取と見られる痕跡があるから、創建当初のものではなく、時期の下るものである。また玉石敷きの通路についてもこれと一連のもので、時期が下る可能性があるが、本調査ではこの点については確定できなかった。

## B 江戸時代の講堂

**建物** これまで建っていた江戸時代末期建立の講堂は桁行の柱間五間（総長19.5m）、梁間五間（17m）で、創建当初の講堂に較べて東西規模が約半分に縮小されている。その築造は、当時まで残っていた創建以来の礎石を抜き取り、基壇の東西をカットして削平し、残りの部分に土を積み足して新基壇とし、新たに礎石を据え直して建物を作っている。江戸時代の基壇土は暗褐色の砂質土で、厚さ10cm前後の層をなしているが、それほどつき固めた様子はない。

**礎石** 礎石は計30個で、大小さまざまであるが、重さ2tを越す大石もあって、全体的に大きい。礎石表面の柱座の加工は大別して以下の四種がある。1）表面を一辺約60cmの方形に造りだし、十字に溝を切って柱の中心を示したもの（図51-5）で、中には墨書で番付を記す石

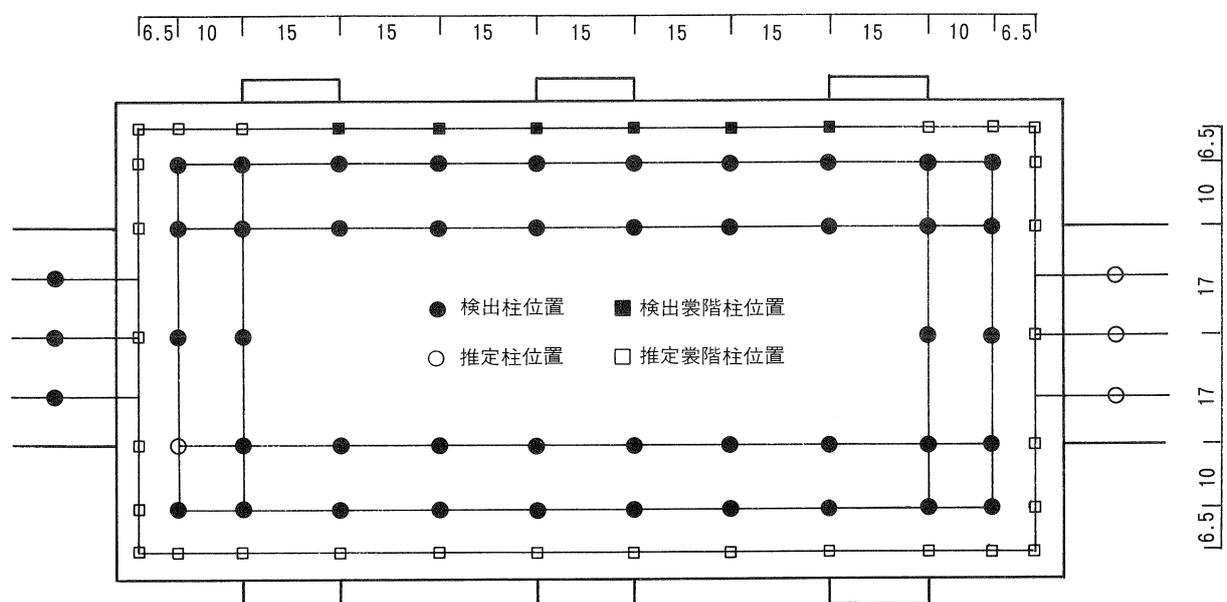


図50 創建講堂柱配置図

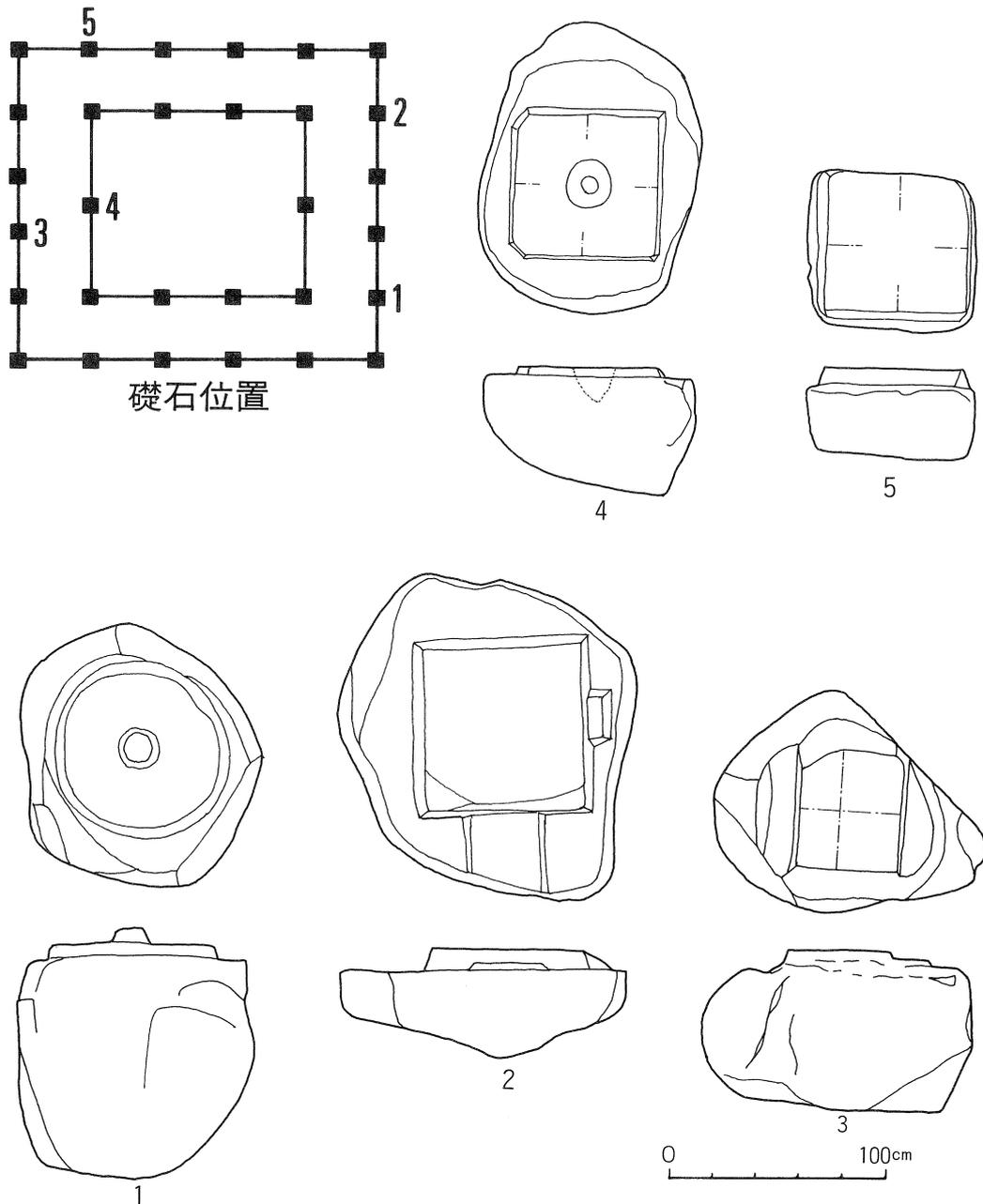


図51 江戸講堂礎石 3 : 100

もある。このタイプが最も多い。2) 径約75cmの円形の柱座に径15cmのホゾを造り出す礎石が3個(図51-1)、3) 径約65cmの円形の柱座に径20cm深さ15cmのホゾ穴をほる礎石が1個(図51-4)、4) 一辺75cmの方形柱座でそれから二方向に地覆座を造りだした礎石が1個ある(図51-2)。1)の加工は江戸期のものであろう。中にはそれ以前の加工の痕跡が一部に残るものもあり(図51-3)、二次的な加工の礎石が多いと思われる。2)~4)は江戸再建以前の加工と推定され、複数の建物で使われていた礎石を転用したものと見られる。なお、4)の礎石は現在榎原市にある本薬師寺金堂跡に残る礎石の形と類似していることを付け加えておく。石質の詳細な検討はまだ行っていないが、現存する江戸の講堂礎石の中には、本来創建講堂に用いられていたもの、他から持ち込んだものなどがあり、その多くは表面を再加工し、一部は

加工を加えないまま礎石に使ったのであろう。礎石の据付掘形は西側柱部分のみ円形で、直径1.8m前後、深さ1.1m前後と深く、それ以外は一辺1.8m前後の方形の掘形、深さは0.6m前後と浅い。大小の根石を二ないし三段に敷いた上に礎石を据えている。

江戸の講堂には薬師三尊を安置するため、須弥壇を中央北寄りに築いた。東西約8.5m、南北約3.5mで高さは80cmある。須弥壇の下には鎮壇具が埋められている。(寺崎保広)

### 3 遺物

#### A 瓦磚類

次表のように大量の瓦磚が出土した。基壇の周囲に掘られた土坑ないし、近世の整地土から出土したものが多く、特に基壇北側の東西の土坑は瓦層が厚さ60cmにも及ぶ。瓦の年代は奈良時代から江戸時代に至るまであり、その種類も多様である。おそらく、江戸時代に講堂を再建する際に、周辺にあった瓦をまとめて廃棄したものであろう。

集計表の瓦のうち、6000番代の型式は奈良時代、薬師寺38～87および236～287が平安時代、それ以外は鎌倉時代以降のものである(『薬師寺報告』)。従来より、薬師寺の創建軒瓦とされてきたのは軒丸瓦6276A-軒平瓦6641Gのセットと軒丸瓦6276E-軒平瓦6641Iのセットで、前者

表10 第263次調査出土瓦磚類集計表

| 軒丸瓦   |   |    |        | 軒平瓦 |    |        |     | 丸瓦 |        |           |        |           |      |   |
|-------|---|----|--------|-----|----|--------|-----|----|--------|-----------|--------|-----------|------|---|
| 型式    | 種 | 点数 | 型式     | 種   | 点数 | 型式     | 種   | 点数 | 重量     | 2,906.4kg |        |           |      |   |
| 6138  | B | 2  | 薬師寺120 |     | 2  | 6553   |     | 3  | 薬師寺246 | 6         | 点数     | 14,443    |      |   |
| 6225  | E | 2  |        | 147 | 3  | 6641   | G   | 31 | 254    | 1         | 平瓦     |           |      |   |
| 6235  | Q | 1  |        | 168 | 1  |        | H   | 22 | 263    | 1         | 重量     | 5,818.5kg |      |   |
| 6276  | A | 58 |        | 170 | 1  |        | I   | 4  | 267    | 2         | 点数     | 39,245    |      |   |
|       | E | 7  |        | 174 | 1  |        | K   | 3  | 268    | 2         | 磚      |           |      |   |
| 6284  | L | 1  |        | 178 | 1  | 6647   | C   | 2  | 271    | 1         | 重量     | 5.6kg     |      |   |
| 6304  | E | 7  |        | 193 | 1  | 6663   | F   | 3  | 285    | 1         | 点数     | 9         |      |   |
| 薬師寺38 |   | 3  |        | 196 | 1  |        | H   | 4  | 287    | 1         | 凝灰岩    |           |      |   |
| 39    |   | 32 | 巴      |     | 47 |        | I   | 5  | 296    | 6         | 重量     | 32.9kg    |      |   |
| 40    |   | 6  | 型式不明   |     | 34 | 6664   | K   | 1  | 303    | 1         | 点数     | 65        |      |   |
| 41    |   | 1  | その他    |     | 1  |        | O   | 1  | 305    | 1         | 道具・その他 |           |      |   |
| 42    |   | 14 |        |     |    | 6682   | F   | 1  | 306    | 6         | 鬼瓦     | 1         |      |   |
| 43    |   | 5  |        |     |    | 6685   | F   | 1  | 309    | 2         |        |           | 隅切平瓦 | 1 |
| 47    |   | 1  |        |     |    | 6691   | A   | 1  | 313    | 1         |        |           |      |   |
| 54    |   | 1  |        |     |    | 6697   | A   | 1  | 323    | 3         |        |           | 瓦製品  | 1 |
| 64    |   | 1  |        |     |    | 6763   | B   | 1  | 343    | 1         |        |           |      |   |
| 69    |   | 1  |        |     |    | 薬師寺236 |     | 11 | 355    | 3         |        |           |      |   |
| 76    |   | 1  |        |     |    |        | 238 | 2  | 356    | 11        |        |           |      |   |
| 86    |   | 3  |        |     |    |        | 240 | 6  | 360    | 1         |        |           |      |   |
| 87    |   | 1  |        |     |    |        | 241 | 12 | 連珠文    | 1         |        |           |      |   |
| 102   |   | 1  |        |     |    |        | 242 | 3  | 型式不明   | 25        |        |           |      |   |
| 117   |   | 1  |        |     |    |        | 245 | 5  | その他    | 9         |        |           |      |   |
|       |   |    |        | 243 |    |        |     |    | 209    |           |        |           |      |   |

が本屋根要、後者が裳階用である。今回はこの他に軒平瓦6641Hも比較的多数出土している。ちなみに、移建か否かで問題となる藤原京の本薬師寺の創建瓦は、6276A-のは6641Hのセット（本屋根用）と6276E-6641Kのセット（裳階用）と考えられている。また、平安時代の瓦が奈良時代のそれに匹敵するほど出土しているのも特徴的である。仮に、今回出土した瓦の大半が講堂に関連するものだとすると、天禄消失後の10世紀の再建時の瓦ということができよう。

（寺崎保広）

## B 平城薬師寺講堂江戸須弥壇出土の鎮壇具

嘉永3年(1852)に再建された講堂の須弥壇から出土した鎮壇具は、蓋を伴う広口の甕の中にほぼ同大の小壺が五つ、中央と東西南北に配されていた（小壺を東・南・中央・西・北の順で、①～⑤とよぶ）。

**土器** 鎮壇具を納めていた甕は酸化焰焼成の素焼で、内外面ともに轆轤ナデで調整され、口径25cm・高さ26.5cmを計る。胴部内面には後述の小壺を封じていた紙片が出土状態での東・西側に付着する。蓋も素焼で、口径28cm・高さ3.6cmを計る平坦な器形で、円盤上に口縁部を付した、手づくねの粗製の作りである。焼きも甕に比して甘く、甕に本来的に伴うものではなく、急遽製作した感がある。

小壺は酸化焰焼成の素焼で、甕に比して焼成度はよい。最大径11.5cm前後・高さ9.0cm前後・口径6.4cm前後を計り、算盤玉形の胴部に直立した1.4cmの口縁をもつ、同一の器形である。外面は細かな轆轤ケズリで調整される。肩部外面から口縁・内面は轆轤ナデで調整される。

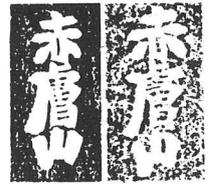
小壺の蓋も、身と同一の焼成で、最大径7.4cm前後・高さ1.9cm前後を計る同一の器形である。外面は細かな轆轤ケズリで調整され、内面は轆轤ナデで調整される。外面の頂部中央には「赤膚山」を記した印が押される。

これらの土器はすべて、赤膚焼であるが、小壺の器形は赤膚焼には認められず、鎮壇具埋納のための特注品と考えられる。

**鎮壇具** 鎮壇具の出土状況は、蓋は土圧によって破壊され、土砂が甕の内部に若干流入していた。五個の小壺のうち②には蓋がなく、口縁まで土が充満していた。他の四個体は蓋で閉じられており、幅1.8cmの紙で十文字に封がされており、封は小壺の肩まで及んでいる。蓋のなかった②の肩にも、封の跡が残っていた。甕の中に小壺が安置された状態で、X線撮影を行うと、それぞれの小壺の中に二個の物体があるように確認できた。甕の中から五個体の小壺を取りだし、X線撮影を行うと、②は土が充満するだけであったが、他の四個体の小壺の内部には、物体二個がそれぞれに認められた。甕の内部の土砂を除去すると甕の蓋の断片も出土した。また、蓋がなされていなかった②の小壺の下には甕の底部に接して蓋が上下逆におかれていた。この蓋と小壺は直接接していない。この蓋と甕の間に詰まった土の中には、X線撮影で二個の物体が認められた。

それぞれの小壺を開封すると、内部には金箔で包まれた鉱物二個と、稲粳の炭化した暗褐色の細粒と米粒とが固まった状態で確認できた。しかし、これらの米粒は食用とする胚乳部はすべて風化しており、果皮・種皮等のヌカ層だけが残った中空のものである。土の充満していた②の中の土を除去すると、小壺の上部からは甕の蓋の断片が出土したため、上部の土は甕の蓋が割れた際の流入土である。底部には他と同様に、中空の米粒が残存し、木炭の小片も確認できた。それぞれの小壺に入っていた二個の鉱物は、分析の結果、水晶（石英）と紺色のカリウム鉛ガラスであった。また、甕の底部の二個の鉱物も水晶とカリウム鉛ガラスであった。水晶とガラスはそれぞれ同一個体を砕いたものと考えられるが、接合はしない。

以上の状況をまとめてみれば、それぞれの小壺には、稲粳と金箔で包んだ水晶・カリウム鉛ガラスが納められ、蓋をされ、一旦、紙片で十文字に封じられた。②の小壺の封を解き蓋を開け、粳の大半と水晶・ガラスを甕の底部にばらまき、蓋を上下逆にして南側に置き、中央に③の小壺を置く、②の小壺を蓋の上方にのせる、その後、順序は不明であるが、①・④・⑤の小壺を安置する。出土状況からみても、②の小壺は最後に納めることはできないため、このような安置の順序を想定する。そして、甕に蓋をのせる。小壺の出土した方位が東西南北にほぼ一致するため、甕を埋納坑に安置してから小壺を甕に納めたものであろう。



左『陶器考』模刻  
右②蓋  
図52 小壺蓋の印  
1:1

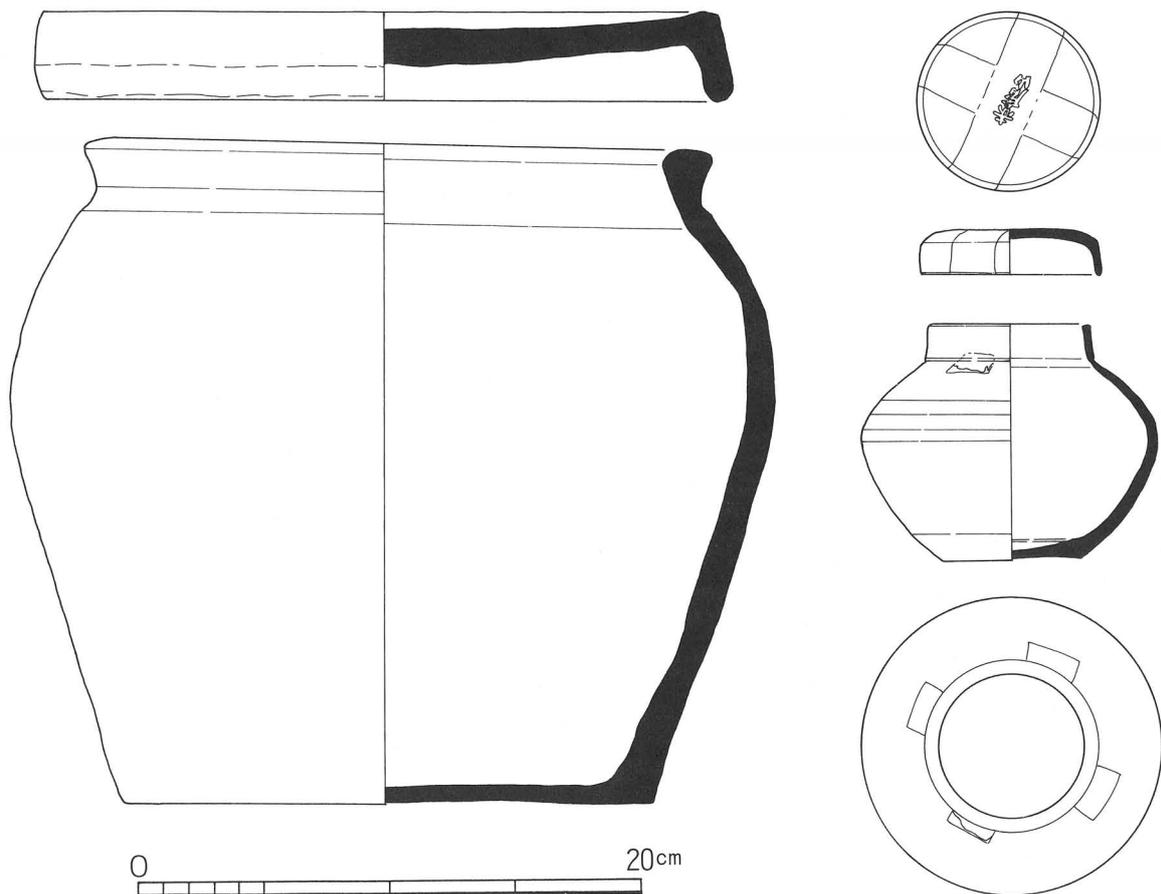


図53 薬師寺江戸講堂鎮壇具 甕・小壺

甕の内部の方位に則った小壺の配置から、当初、五穀・五宝など五行説に対応するものがそれぞれの小壺に埋納されていたと推定し、諸説ある五穀・五宝の配置関係の解明の一助になるものと期待したが、上記のように内容物はすべて同一であった。江戸時代の鎮壇具では、密教系のものが幾つかしられている。それらでは、輪宝を記した小皿を、建物の四隅・中央に配置して、五穀の粥をそれぞれに盛っていたことが知られているが、それらの儀法とは今回出土したものは明かに異なっている。今回出土した物の中で、五行説と関連すると考えられるものは、南側に置かれた②の小壺の中から出土した木炭であろう。この木炭は甕に蓋をのせ、閉じる直前に②の小壺の中に火をつけて入れた可能性が考えられるからである。火は五行説では南を象徴するものである。ただ、何故南側の小壺だけ一旦閉じた封を解き、内容物を甕の中にばらまき、さらに、火のついた木炭を投入したかについては、なんらかの儀礼を想定せざるをえないが、詳細については不明とせざるをえない。

それではこの鎮壇具が、いつ埋納されたかについて考えてみよう。講堂の建物自体の再建は1852年であるが、鎮壇具が埋納された時期については、須弥壇の構築に三度の機会が考えられるからである。一は三尊像を移転した際、すなわち、1780年11月9日から1783年3月15日の間である。詳しくみれば、安永9年11月9日（1780）に西院弥勒堂にあった三尊像を講堂跡に移転し、修復のための仮屋を作る届出が出され、翌年には3×3間（長さ8間×5間半）の規模の仮屋が講堂の中央部に造営されている。この間に三尊像が移転されていたならば、この間のある時期。仮屋完成後の三尊像移転ならば、天明3年3月15日（1783）から4月初旬まで三尊像は修理されているため、すでに移転は完了しており、仮屋完成から天明3年3月15日までのある時期とすることができる。二は文政2年6月12日（1819）の地震で、三尊像脇侍の首が落ちるが、この時には何故か三尊像は仮屋の外に置かれており、15日に本尊が仮屋に運び込まれる。三尊像が外に置かれていたのが須弥壇構築のためであれば、この時期。三は再建講堂の造営が始まり、その完成をみた、弘化5年～嘉永5（1848～52）年の間である。これらの三度の機会のうち、はたしていずれの機会とするのがよいのであろうか？

それを解く一つのかぎとなるのが、小壺の蓋に押捺された「赤膚山」の印であろう。この印は田内梅軒の『陶器考』（嘉永7（1854）年刊）によれば、「遠州」印とされるものであり、赤膚窯の寛政年間（1789～1800）の再興時以前とされる。この認識は嘉永5年の講堂再建と近接した時期のものであり、土器の製作年代を考える上で重要であろう。「赤膚山」の印は宝暦2年（1752）製作と考えられる、「宝暦年製」を記す東大寺発注の油壺にも、異なる書体のものが押されている。また、この「遠州」印が押される赤膚焼の伝世品は、作風が古風なことも指摘されているのである（村上泰昭「赤膚焼の刻印」『赤膚焼』1991年）。

鎮壇具の埋納の時期は上記のように三度の機会があるが、史料上からはいずれとも決め難い。ここでは、赤膚焼の小壺の蓋に押される「遠州」印を重視し、その年代観から第一案の安永9

年11月19日から天明3年3月15日までの埋納と考えたい。すなわち、三尊像の西院弥勒堂から講堂跡地への移転に際し、講堂基壇に須弥壇が築かれたと考えたい。また、これらの赤膚焼の土器は寛政年間再興以前の赤膚焼の生産を考える上でも重要な資料となろう。

なお、その他注目すべき遺物として二彩椀1点がある。 (立木 修)

#### 4 おわりに

発掘調査から明かになった創建講堂の規模を『薬師寺縁起』と比較すると、裳階を除いた柱間総長が桁行125尺(37m)、梁間54尺(16m)となり、ほぼ縁起の記述に合致する。金堂については、複数の所伝を列記するが、裳階を除いた全長にほぼ一致する記述もあるので、縁起の書き方として、裳階を除いた寸法を記すという原則があったのであろう。

前記の文献史料からうかがわれる講堂の変遷からすれば、①創建講堂、②貞元再建の講堂、③安永の仮屋、④嘉永の講堂の四種の遺構が残っている可能性が考えられるが、実際には①と④が明かになったのみで、②と③については明確な遺構を検出できなかった。

金堂の発掘によると、同規模で再建する場合に、それまで残っていた礎石を用いて、上に建物を新たに建てているから、②の再建講堂も①と同じ規模とし、基壇と礎石をそのまま利用したのではないかと推定する。ただし、その際に縁起に「今壁」と注記するように、連子窓を壁に改めるなど部分的な変更を行い、また講堂周囲の石組の雨落溝や石敷通路など、当初に遡らない遺構はあるいはこの時の造作であろう。

また、③についてはどの程度の仮屋なのか、手がかりがないが、須弥壇下に埋められた鎮壇具の年代が注目される。赤膚焼の刻印により、製作年代が寛政以前だとすると、それはちょうど③の時期と合致するからである。つまり、③の時に三尊をこの地に移座する段階である程度基壇を土盛り整形して、須弥壇まで築いており、その後本格的な建物の建設に移行したものかも知れない。

今回の調査によって、薬師寺の主要伽藍の発掘は終了した。創建講堂の規模が確定し、新たに基壇高や基壇築成状況が判明し、今後の再建に有効なデータを提供でき、また古代寺院研究にとっても良好な資料を得ることができた。 (寺崎保広)

II-10 頭塔の調査 第264次

頭塔の今年度の石積修理復原範囲は、北半部西面の基壇および塔本体石積のB段からG段までである。石積の解体に際し、塔本体石積に2ヶ所（A,Bトレンチ）、基壇に1ヶ所（Cトレンチ）の発掘区を設け、下層頭塔の石積、基壇構築の状況等を調査した（図54）。以下に各調査区ごとの成果、石積解体に伴う新知見、およびこれまでの調査成果と合わせて復原した下層頭塔の規模、上層との関係などについて述べる。

1 遺 構

**Aトレンチ** 上層G段石積から約1.5m内側に入ったところで下層第1段石積を検出した（図55）。下層第1段石積は東面と同じく石積前面に2段の階段状石積を有していたようである。ただ残念ながらここでは下層石積の前面にあるはずの下層基壇上面石敷を確認することができなかった。保存状態が良好な上層石積を残したままの断割り調査であり、下層基壇上面が上層基壇上面より60cm近く低いことを確認したにとどまった。上層石積内部は、東、北面同様丁寧な版築によっ



図54 第264次調査区位置図 1 : 150

て突き固め、築成されていた。

**Bトレンチ** 西面第1段中央石仏の裏側を断ち割る形に設けた発掘区である(図56)。ここでも下層石積か、と考えられる石積を発見したが、東面中央石仏裏側とは形態が異なること、想定される下層基壇上面に対し検出した石積下端が合わないなど、問題が残った。

平面位置は上層G段石積から約1.7m内側であり、Aトレンチの下層石積と結ぶと下層は上層に対して北で西に1度強振れる。この上下層の振れの関係は角度に多少の差はあるものの東面、北面と同様である。一方、東面中央石仏裏側位置における下層石積は仏龕状を呈していたが、この部分では直線状であり、仏龕の形態をとっていない。

また、石積の前面には石敷があった。当初この石敷を下層仏龕内部の石敷かと考えたが、石敷をはずし断面を観察すると石敷は上層石仏(西面第G段中央石仏)の背面に直接接しており、上層石仏の設置と一連の課程で積土内部に敷かれたものと判断した。

またBトレンチ内下層石積の下端の標高は約111.1mであった。これに対して北に約7m離れたAトレンチ位置における下層基壇上面高は110.15m前後に想定される。したがってBトレンチの石積は1m近く下層基壇上面から浮き上がっていることになる。

こうしたいくつかの不可解な事実からすると、この石積は下層ではなく、上層の築成過程で築かれた内部の土止め施設の可能性がある。

**Cトレンチ** 西面基壇中央部に設けた断割りトレンチである(図57)。西面基壇石積が階段状の石積であったことは、第199次調査(1988年度)で明らかになっていた。しかしこの基壇石積が上層に伴うものであるのか、下層までさかのぼるものであるのかは不明であった。今回、断割り調査の結果を踏まえて西面基壇の復原を行ったが、残存石から復原できる基壇上端のレベルと上・下層の塔本体石積最下段のレベルとの関係から見て、この階段状基壇は下層頭塔の時期に構築されたものと推定した。これは基壇最下段の積石内部から発見された後述の須恵器杯の年代観とも矛盾しない。

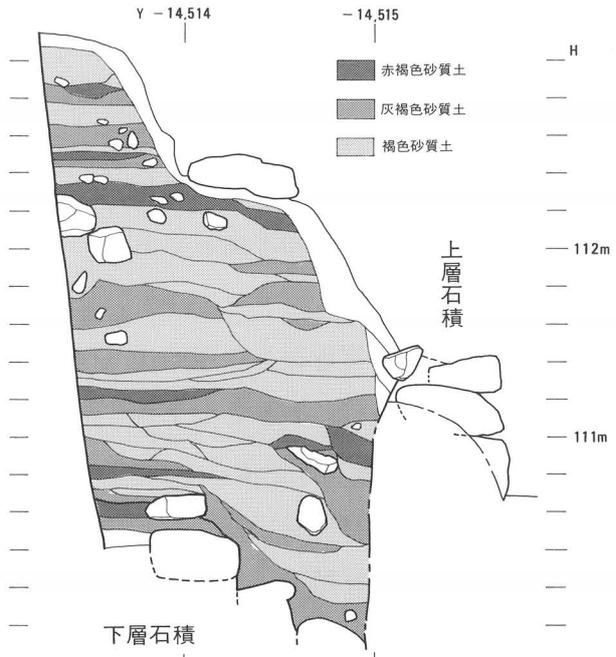


図55 Aトレンチ南壁土層図 1:40

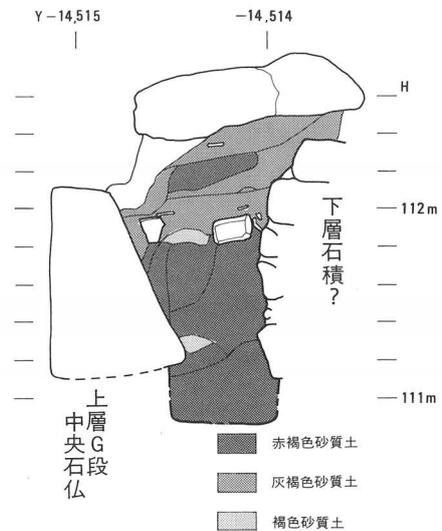


図56 Bトレンチ北壁土層図 1:40

基壇内部の積土は上層塔本体内部の版築に比べ、やや粗い。地山から得たと思われる赤褐砂礫土を主体とした版築状の積土であり、東面基壇で見られたような強く叩き締められた状態ではなかった。

石積基底石は赤褐砂礫土の地山上に積まれた約25cm厚の整地土上面(標高108.5m)に乗っている。

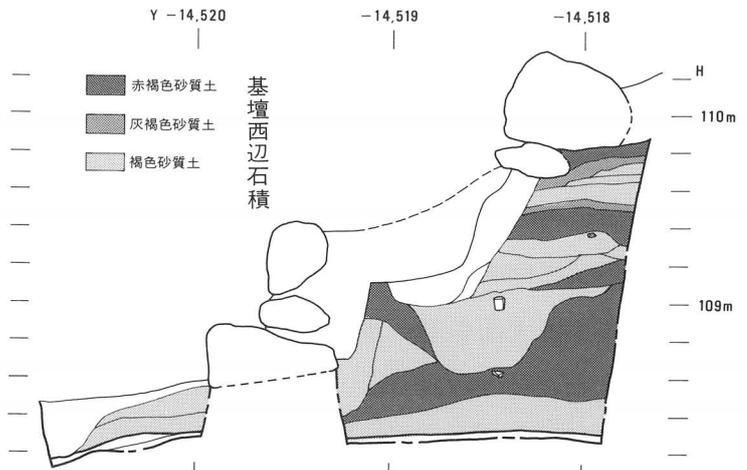


図57 Cトレンチ北壁土層図 1:40

## 2 遺物 (図58)

基壇および塔本体積土に混じって瓦と土器が出土した。

土器の中で顕著なものに基壇最下段積石の内部から出土した須恵器杯BⅢがある。胎土には黒色粒子が多く含まれ、焼き上がりは淡褐色である。須恵器杯Ⅰ群～Ⅵ群のいずれにも属さない。そのため時期判定には慎重を要するが、形態的な特徴から奈良時代後半～末のものと思われる。

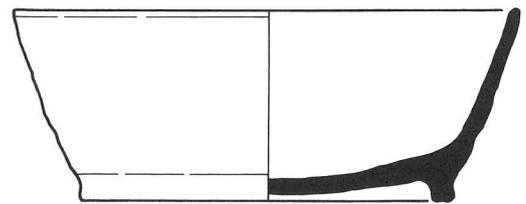


図58 第264次調査出土土器 1:2

瓦はおもに上層塔本体積土から出土し、その傾向も過去の調査結果と同様である。軒平瓦では6732Fが多く、19点出土した。

## 3 まとめ

**下層頭塔の規模** 西辺で下層塔本体石積を確認したことにより、下層頭塔の東西幅が確定した。約21m(71小尺)である。上層塔本体第1段の東西幅が24.2m(82小尺)であるから、下層から上層の作りかえに際し、3.2m(11尺)大きくしたことになる。

**旧地形と基壇との関係 (図59)** 頭塔は東から西へのびるやせた尾根の先端部に位置している。今回の調査で西面基壇下における赤褐砂礫土の地山面の高さが標高108.3mであることが分かった。これに対応する地山面の高さは東面基壇下では109.1m、北面基壇西寄りでは108.8mである。西面では地山面の上に整地土が乗るから、旧表土は取り除かれたとしてもこの地山面は本来の旧地表面に近いと考えられる。一方、東面基壇下の地山面上には整地土がなく、地山の上には中世に基壇を改修した時点の表土と考えられる厚さ10cm弱の腐植土があり、この上に直接中世期の基壇石積が乗る。西に整地土があるということは平坦面を造成しようとした結果であろうから、元々西より高い東側では旧地表面は削平された可能性がある。下層頭塔の構築に際し、東を削り、西に盛土し、約2%弱の西下がり勾配をもつ平坦面が造成されたと推定できる。この上に下層の基壇が築かれるが、できあがった下層基壇の上面も塔本体石積北辺部で見ると、同じく約2%の西下がり勾配をもっている。一方、上層基壇の上面はほぼ水平に造

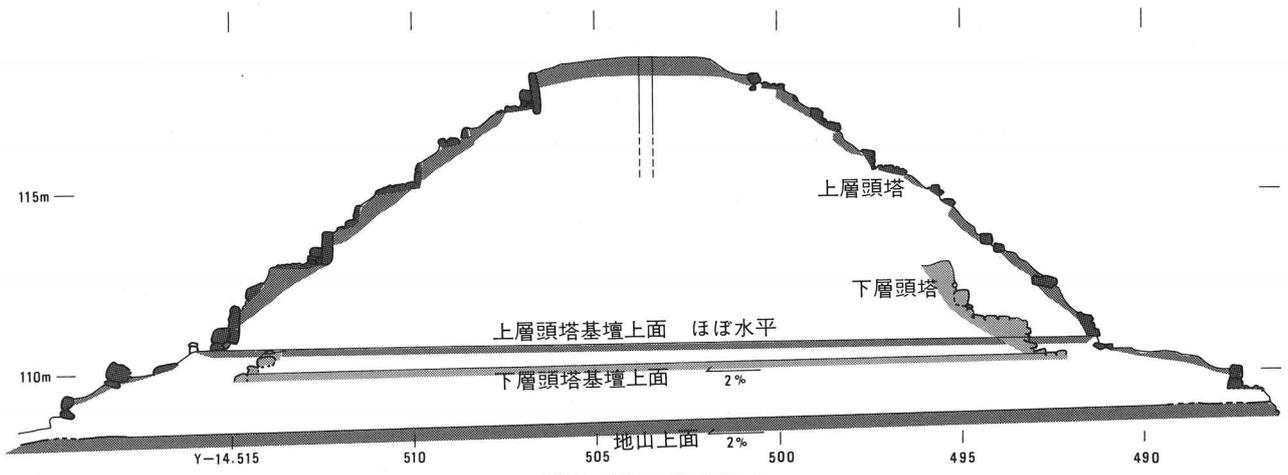


図59 頭塔東西断面図

成されている。下層から上層の作り替えに際し、西下がりであった基壇上面を水平に直したのである。想像を加えれば塔本体石積上面も下層頭塔では基壇と同様に約2%の勾配で西に傾斜していたのではないか。それを上層では塔全体が水平になるよう造り直したと推定できる。

(高瀬要一)